



写真：北田英治

「児童養護施設 東京サレジオ学園」 ——改築後25年を経て

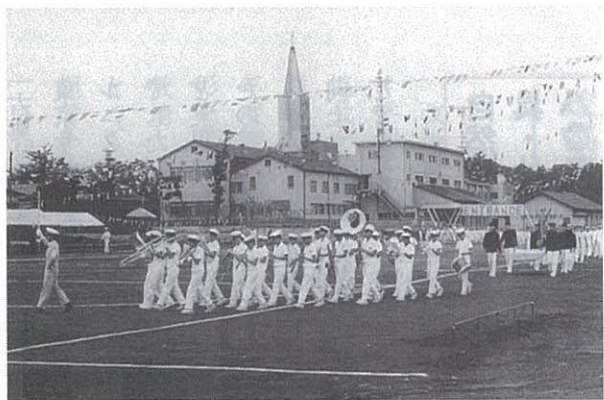
東京サレジオ学園 施設概要

児童養護施設（定員106名・男子） 地域小規模児童養護施設（6名・男子）
東京都小平市上水南町4丁目7番1号 <http://www.salesio.or.jp/>
敷地面積：62,566.85㎡／延床面積：8,872.36㎡
1990年2月移転改築／1994,2004,2009改修
設計：坂倉建築研究所／藤木隆男建築研究所 施工：日本国土開発株式会社／戸田建設株式会社

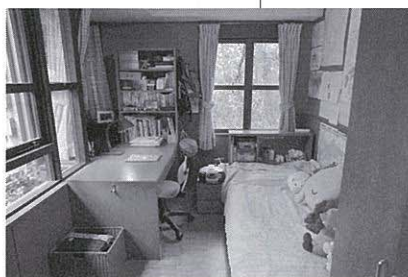
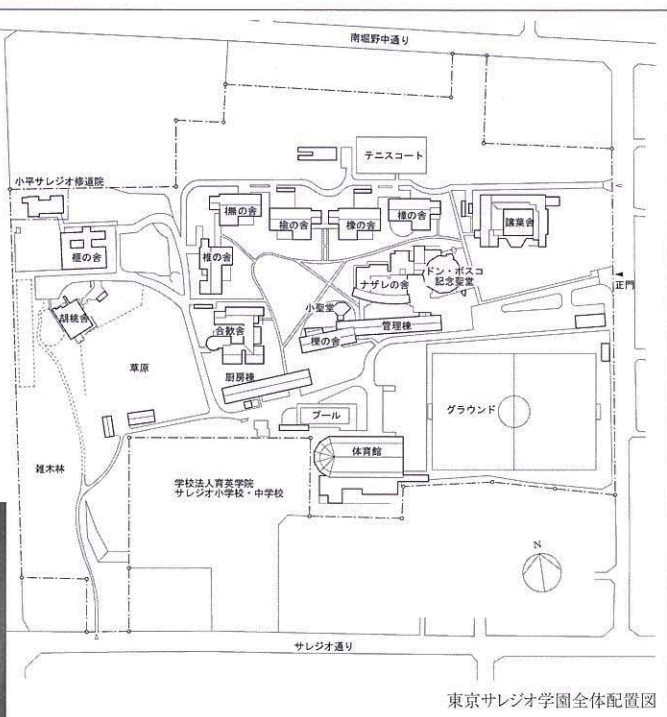
東京サレジオ学園は、戦後間もなくの1948年に、東京都小平市に創立された社会福祉法人の児童養護施設です。旧陸軍建物などの増改築で40年ほどをしのいできましたが、その園舎全体の老朽化がすすみ、また、「大舎制／ヨコ割り（同年齢）／集団的養護／園内教育」という伝統的なヨーロッパの寄宿学校のような養護スタイルを刷新する必要から、行政（東京都）の全面的理解と施設整備補助を得て、1984年から約7年間、4期にわたる設計・工事を行い、1990年2月、低層・分散配置・12棟の建物からなる新園舎への移転改築事業が完成しました。

脱施設化 ——子どもたちに「家」を

「子どもたちに最善のものを」「よい環境は子どもをよりよく育む」という理念のもとに始められたこの移転改築事業の計画内容は、施設側スタッフによる建築委員会と設計チームによる長期かつ頻回にわたるヒアリングと真摯なディスカッション、数多くの既往施設見学などの成果でした。つくられたものは、「小舎制／タテ割り（異年齢）／個別的養護／公教育（通学）」という養護方式であり、「子どもたちの住む『家』（住宅的な園舎）」というハードな施設整備でした。その考え方は当時、関係者間で養護方式と施設整備の「ノーマライゼーションⅡ脱施設化」というキーワードで共通認識されていましたが、いわば



右頁：中庭に開かれた園舎デッキテラスでのバーベキュー風景
本頁上：田園の集落のような新園舎全景
下：改築前の旧園舎全景



右頁：植え込みに囲まれた児童園舎外観「樞の舎（ぶなのいえ）」
左：密度濃く住み込まれた児童居室（ねむの舎／中1）

「古典的な児童養護施設であった東京サレジオ学園のあり方のコペルニクス的転回」を意味するものでした。資金面、スタッフ体制など実現への多くの困難を克服できたのは、園長をはじめとする学園スタッフの「子どもたちのQOL向上」への強い希求があつてのことでした。

自然素材・色・形、家具・什器・備品・緑化、ハウスキーピング

東京サレジオ学園の建築空間／環境にはいくつかの特徴があります。まず「家づくり」ですが、それは瓦ぶきの勾配屋根（家型）で、コンクリート打ち放しの壁と木製家具・建具・床の設えなど、自然素材でできています。またそれは「子ども向けの鮮やかな色彩や楽しい造形」を避け、普通の家に求められるぬくもりと品格を

もたせ、外部空間（芝生の庭）に開いた『自然な住宅／集落』として計画されました。さらに什器・備品類は、個別によくセレクトされたモノで整えられ、それぞれ色柄の違う陶器の茶わんやインド綿のベッドカバーなどが一人ひとりの子どもに与えられています。緑化は特に大切にされ、主として自然樹形のかん木や雑木で構成されています。

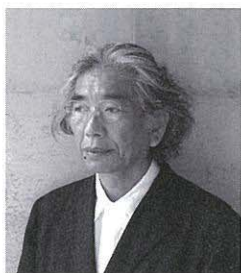
このように子どもの生活空間・環境を、稀有なこだわりをもって改築整備した東京サレジオ学園ですが、その後の入念で良質な維持管理Ⅱ「ハウスキーピング」もほかにあまり例をみないもうひとつの特筆すべき点です。「児童居室の清々しい風通し」「清潔な衣類やベッドメーカーキング」「よくテールセッティングされたあたたかい食事」「季節感豊かな催事や楽しい旅行」「学校／地域への積極的な参加と交流」など整備当初の

空間・環境を極力保存・活用し、「古美つつブラッシュアップ」される児童の育成／生活環境が醸成されてきています。それは、「受容と傾聴」「愛着の器づくり」という、改築後さらに深化してきたサレジオの養護理念実践の場にあふましい様相を呈してもいます。

改築後25年を経て —— 問題点と展望

改築後25年を迎えた東京サレジオ学園ですが、先頃、日本建築家協会から優れた建築の適切良好な維持管理状態に対する「2014年度第14回JIA 25年賞」の表彰を受けました。しかし、広大な敷地と多数の建物をもつ施設にとって、長期的な修繕は大きな負担であり、課題です。さらにその先に、遠からず訪

れる「小規模グループケア」への制度的移行の時期が迫ってきています。その時、熱意をもってつくられ大切にハウスキーピングされている、「美しい町屋や古民家のような『東京サレジオ学園』」に次の改築の時が来るのでしょうか。



みじき たかお
藤木 隆男
建築家
藤木隆男建築研究所代表

* 筆者は、坂倉建築研究所で当初の改築を担当、藤木隆男建築研究所でその後の増改築・改修・建物管理を行っています。

『地域小規模

児童養護施設 縦の舎』

小規模化・地域化のゆくえ

縦の舎 施設概要

地域小規模児童養護施設
 (定員6名・男子/スタッフ常勤2名、非常勤2名)
 東京都国分寺市 <http://www.saisei.or.jp/>
 敷地面積: 513.02㎡ / 延床面積: 251.13㎡
 / 総工費: 約5900万円
 2006年6月竣工・事業開始
 設計: 藤木隆男建築研究所 施工: 不破工業



撮影: 北田英治

縦の舎は、前号で紹介した児童養護施設東京サレジオ学園の分園として計画された「地域小規模児童養護施設」です。本園である東京サレジオ学園は、1992年の移転改築により大幅に小舎化(当初17名/棟)し、その後も少しずつ児童定員の縮減をすすめてきました。定員100名を超える大規模施設として長年の活動実績のある本園にとって、それ以上の急速な「小規模グループ化」には大きな困難を抱えていましたが、2004年、行政から当該施設整備の要請があり、敷地確保に地域の理解者の協力も得られ、計画は一挙に現実化したのです。厚生労働省の児童養護施設整備ビジョンである「社会的養護の課題と将来像」にそった「小規模」実践は、東京サレジオ学園にとって大きなチャレンジとなりました。

『町の仕舞屋』としての縦の舎

縦の舎は、東京都小平市の本園から車で10分、一帯に武蔵国分寺史跡のある国分寺市西元町に計画された児童定員6名のグループホームです。一般的には、「普通の民間住宅」を活用して運営されることも多い施設モデルですが、縦の舎の場合、「モダンな住宅『建築』/1軒のタウンハウス、あるいは『町の仕舞屋(商店でない普通の家)』として特別に計画・設計されました。

地域の住宅や畑に囲まれた郊外の広い敷地に計画された2階建/し字型平面の縦の舎は、「雑木やかん木のワイルドな庭」を介して東南側の道路や町に対し開いています。と同時に、周囲を「低い土手や生垣のガーデニング」で囲み、

家の内と外とが相互に「ひと気」を感じつつ一定以上の視線を遮る「緩やかな『見る/見られる』関係」をつくることを心がけてつくられています。

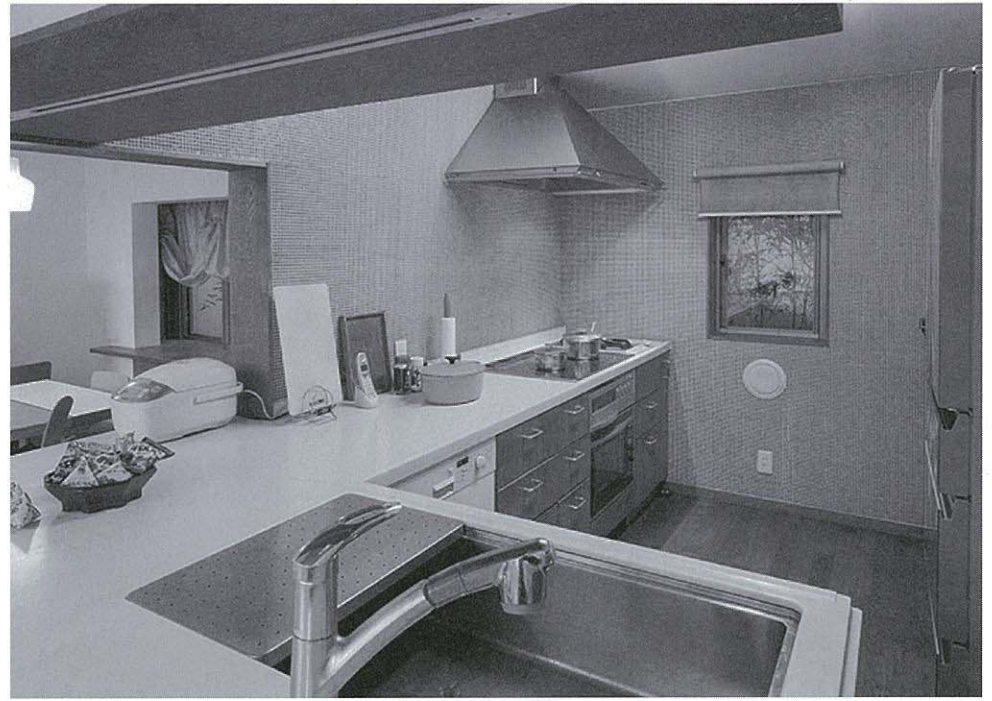
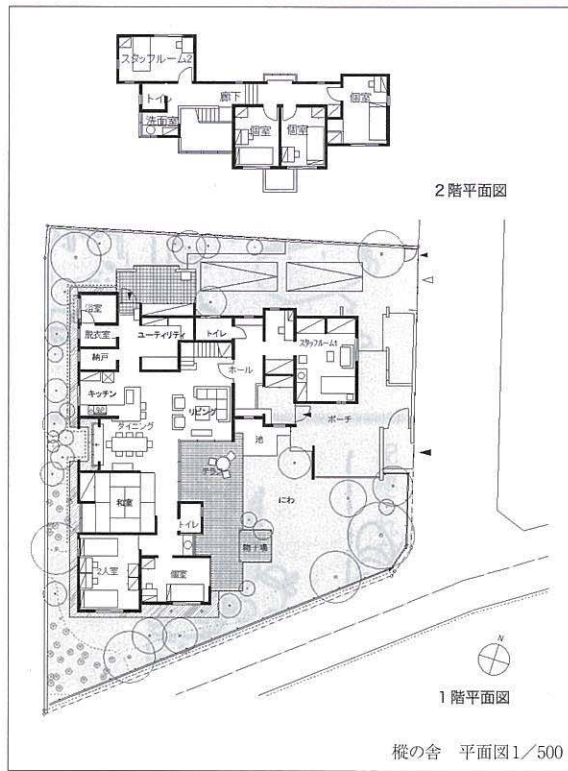
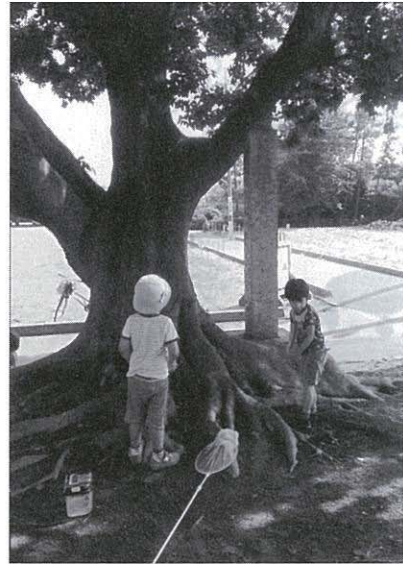
在来工法の木造建築は、それ自体、人の居住に優しい雰囲気醸し出しますが、大きな窓や各部造作など室内設えも木質系で徹底し、しつこい塗の清潔でぬくもりのある「自然な木造住宅の居心地」を得ています。また白木の北欧家具・照明によるダイニング、業務用食器洗浄機付IH・ガス併用のオープンキッチン、洗濯・乾燥ができ、衣類をたたむ作業テーブルを置いた広めのユーティリティ、パネル式輻射冷暖房による児童居室の清浄な室内温熱環境など、「おしゃれさと機能性/実用性確保」という、サレジオ流グループホーム建築の理想を追求しています。それは、本園の改築後20年にわたる子どもの生活環境



右頁: LDK 全景。見通しがよく、オープンな吹き抜け空間
 本頁右上: 手前に黒土の畑、遠くに高層団地。のどかな郊外住宅地の「モダン住宅」(外観全景)
 右下: シナ合板の内装、輻射冷暖房の児童居室(小6)
 左下: 生垣で囲まれた庭を介した家と町の関係

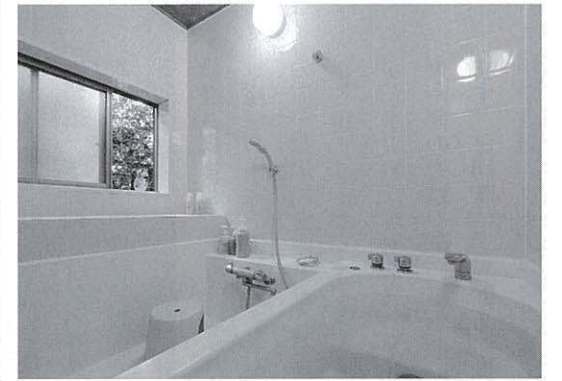


右頁上: IH/ガス併用、大型食洗機を組み込んだL字型オープンキッチン
 右頁右下: 1818サイズのバス・ハーフユニットを利用した広めの浴室
 右頁左下: ユーティリティ: 洗濯/乾燥/アイロンがけの作業室 (3畳大)
 本頁左: 地域のなかで。近所の公園で幼稚園の友達と虫捕り



あった。地域の方々も新しく建った一軒の家にきつと不安も抱いていたことだろうし、初めてかかわる施設の子に、戸惑うことも多かったのではないかと思う。私達も施設ではあっても、より家庭に近い環境づくりに出来る限り努めてきたつもりである。多くの友達の親御さんにあたたかい声をかけられながら過ごしてきたC君の6年間を振り返りながら、小学校の先生や保護者の方々をはじめとして、幼稚園関係の方々や、地域の方々、深い愛情を持って子どもたちに関わってくださっていることを、今強く感じている。まだまだ努力してゆかねばならないことも多いが、これまでに積み重ねられてきた地域の方々とのあたたかな関係を大切に、感謝を忘れず、これからもこのどかな国分寺の地で、穏やかにグループホームが続いていくことを願う。(後略)

ここには、恵まれた地域、敷地



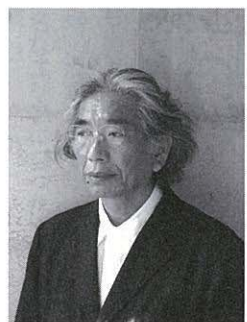
改善/ハウスキープのノウハウの結晶であり、今後の児童養護施設のあり方への試行でもあるのです。

**地域のなかで
—ある職員の養護報告から**

平成23年度の東京サレジオ学園機関誌『ほとすNews No.14』の中に寮長(1人夜勤の時、熱を出した子どものため留守番を1人残し、5人の子どもを引き連れて病院に駆け付けたという武勇伝をもつ、若き肝っ玉母さん) Tさんの養護報告の次の一節があります。少し長いのですが、開設6年めの縦の舎を物語る文章として以下に引用します。

「……改めて6年の月日を振り返ってみると、当初は全く初めての土地でのグループホームのスタートであり、知り合いもいないなかでのゼロからのスタートで

環境と施設建築、高い専門性と熱い情熱をもったスタッフの養護的まなざし、学校や地域住民のあたたかい理解と受容など、「地域小規模児童養護施設 縦の舎」で生活し成長していく子どもたちを取り巻く、ごく平穏な暮らしが確保されつつあるのが感じられます。昨年のハロウィーンには、変装した子どもたちが町に繰り出したとか。そんな出来事を耳にするにつけ、施設づくりに携わった建築家冥利に尽きる思いがするのです。



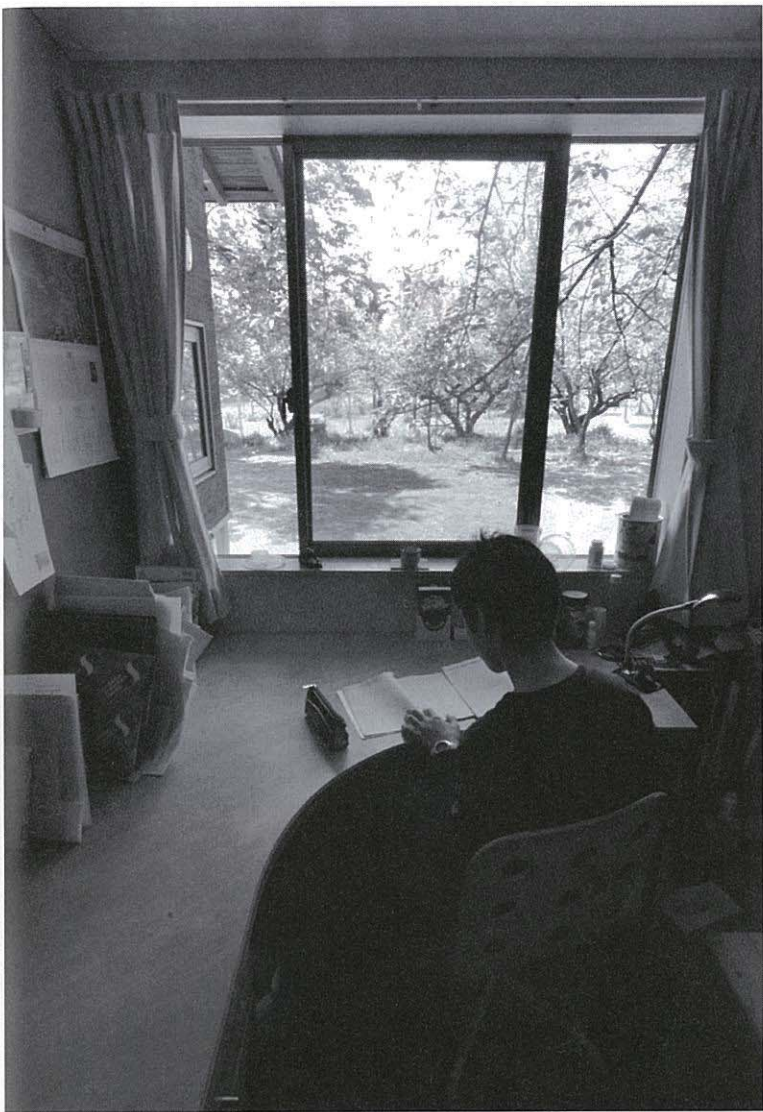
お 藤木 隆男
 建築家 藤木隆男建築研究所代表

筆者の関わったいくつかの改築事例を通して、計画の意図、事業の実際、子どものためにつくられた生活空間／環境、問題点と展望などを、実務的実践的に解説し、今後の施設づくりの参考、指針にならぬことをめざします。

「児童養護施設 聖ヨゼフ寮」 「中舎」の選択

聖ヨゼフ寮 施設概要

・児童養護施設（定員32名／スタッフ20名）
・大分県中津市
・敷地面積：101,084.73㎡／延床面積：1,302.96㎡／総工費約2億2000万円
・2004年5月竣工・事業開始
・設計：藤木隆男建築研究所／施工：日本国土開発株式会社九州支店



撮影：北田英治

印象的な山容を誇る八面山^{はちめんざん}を遠く南に望む3万坪を超える広大な牧草地に、児童養護施設「聖ヨゼフ寮」があります。すでにこの改築整備計画の始まる時点で、カトリック・キリスト教的人間論に基づきながらも、現代の新しい養護理論／システムを模索しつつあった「聖ヨゼフ寮」でしたが、子どもたちの生活空間は、戦後連綿として建て続けられてきた前身の小中学校・児童養護施設「ドン・ボスコ学園」の「チャペル付寄宿学校」のような鉄筋コンクリート造の大きな建物と部屋でした。それは、当時すでに新しく個別の処遇、家庭的住環境をめざしていた「聖ヨゼフ寮」にとって、ハード面での大きな課題でした。この地域性豊かな自然環境のなかの「サンクチュアリのような子ども



右頁：児童居室窓まわり。個室学習机は広い「L字型」
本頁右上：遠く八面山を望む新園舎の中庭で遊ぶ子どもたち（俯瞰）
左下：「屋敷」のように連なる新園舎各棟（西側正面全景）
右下：塔のあるチャペルを取り巻く旧園舎「ドン・ボスコ学園」



もの世界」も、戦後50年以上たち、すでに安定・成長した日本社会にあって、「大舎制園舎の老朽化」「集団生活ゆえの個の領域の欠如」「地域社会からの隔絶」など、さまざまな改善すべき問題を抱えるに至り、ようやく全面改築の機運が高まっていたのです。

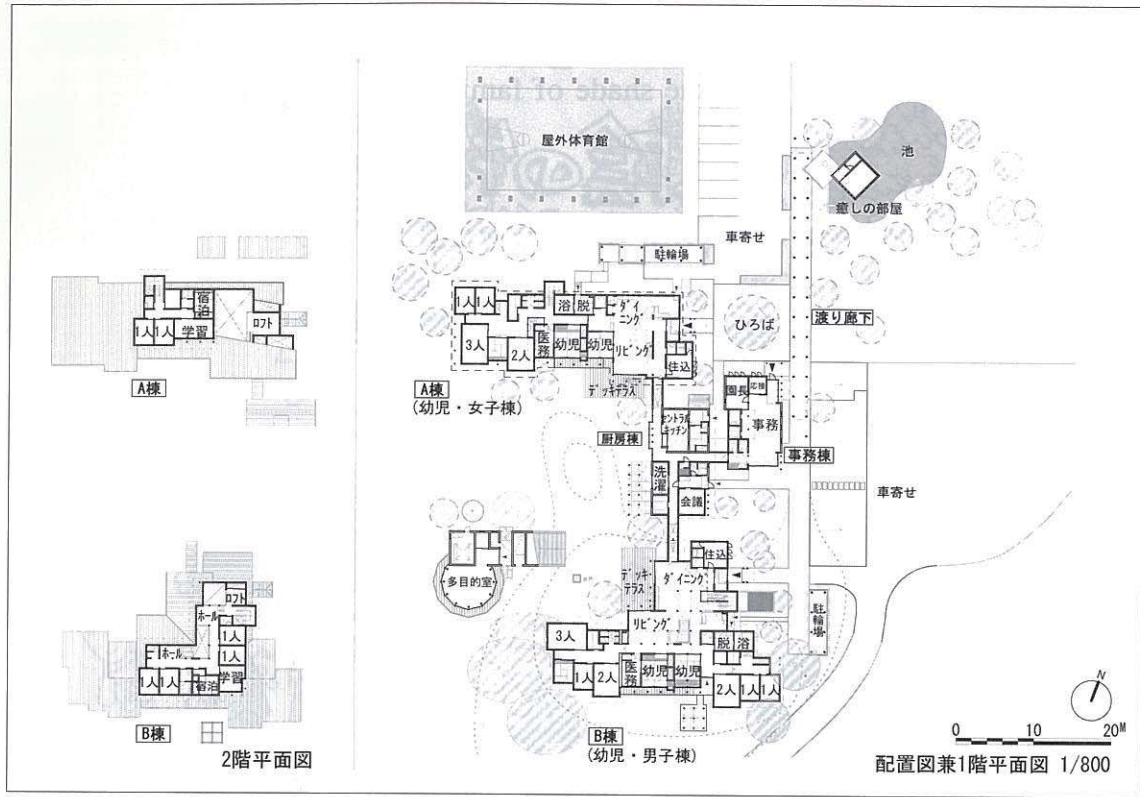
一歩手前のステップ 「中舎」

ところで、現在目標とされている児童養護の方向は、「集団養護からグループホーム／里親へ」「被虐待児対応（心理や医療）や地域子育て／家庭支援」「食育」などのキーワードで説明されているようですが、ここ「聖ヨゼフ寮」についていえば、改築時にそのような新しい考え方ややり方あるいは専門性に飛びつくというよりむしろ慎重であったのです。ス

タッフの勤務負担増や、長年行われ習慣化した養護ノウハウ転換の困難さなど、改築整備計画のための2年がかりの計画ヒアリング／検討の結果、新園舎は「グループホームの一歩手前の、いわば『中舎』」：計画定員35名（幼児・男子20名＋幼児・女子15名／2棟）、木造2階建の建築が選択されることになりました。

田園の集落あるいは 「地域の『屋敷』」として

建物は低層、分棟（2棟の児童棟を含む6棟）連結型で、広い敷地の中央に「屋敷」のように集中配置されました。それはいくつかの緩勾配の片流れの金属屋根で覆われています。広い空を削り取る「スカイ・スクレーパー」のように薄く、大きく張り出した軒先が作るそのスカイラインは、集落

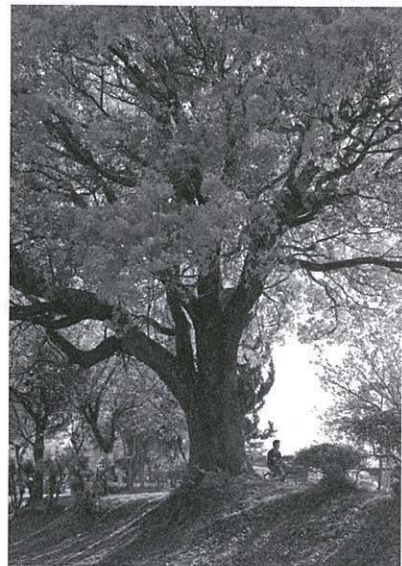


本頁右上：女子棟リビング。円形のソファとロフトへの階段
 左上：子どもたちが気軽に立ち寄れる、開かれたスタッフ事務室／作業・休憩コーナー
 右下：中庭のバビロニア「多目的室」内観

園内通学路土手に残る巨木

を上げているといわれる大分県ですが、『聖ヨゼフ寮』では比較的幼児の割合が増えているとのこと。また、入所期間の短い子どもが多くなり、そこは長く住まうところⅡ「居住地」から、移り住むところⅡ「通過点」の様相を示しつつあるようです。

小規模グループケアが推奨される現在、ここでもさらなる小規模化への改修構想はあるようですが、「子どもの育ちという視点」からみる時、ベテランを活かした豊かな職員構成、草刈りのおじい



さんなど地域ボランティアの受け入れと交流、キリスト教福祉の精神的風土、豊かな自然・建築環境など『聖ヨゼフ寮』が培ってきたものを残し、「数合わせだけの小規模化」に終わることのないスムーズな移行が求められています。



たかお 藤木 隆男
 建築家
 藤木隆男建築研究所代表

としての新園舎の景観デザインのライトモチーフです。また、建物まわりには豊後梅やくぬぎなどの既存樹木と緩やかな起伏の芝生、かん木や生垣などの住宅的緑化で囲まれた「自然で地域性豊かな児童養護施設の建築環境『ヨゼフの新しい場所性』」を生み出すことが試みられました。

建築は、構造材、床材、枠・建具材ほかの部位に、日田杉などの県産の杉材を多用しています。とりわけ、片流れ軒裏の化粧垂木と児童棟全域にわたる素地床板張りには、この建築の向かう意識ともっている性質をよく表しています。つまりこれは「杉の建築」なのです。それは柔らかく、節もありませんが、保温性と調湿性に優れた素材による建築であり、そこでは子どもたちは安心して裸足で住まうことが可能なのです。

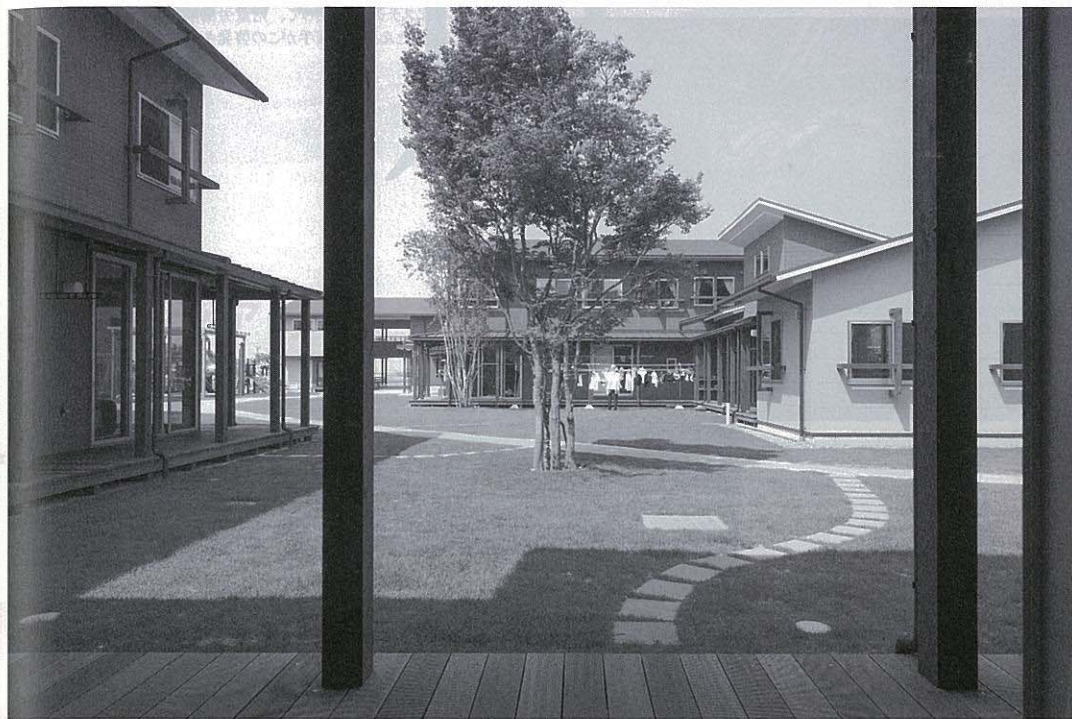
子どもたちが使う家具、つまりベッドや机、収納棚も、杉の無垢

地域風土のなかでの緩やかな移行

材やシナの積層合板を使用した特注デザインのもので整えられています。これも子どもたちの日常生活を力強く受け止め、包み込んでくれるでしょう。またリビングのソファは、杉のフレームの中に端切れ古布のパッチワークのシートで被われたクッションが敷き詰められたもので、常に接ぎの当てられた状態をあらかじめ作り出し、くつろいだ日常性を演出しています。

ランドスケープから建築、家具に至るまで、一貫してめざしたものはシンプルで地味ですが、子どもたちにとってあたたかく安心な居住性であり、よりよいハウスキープで「古美ていく」住環境なのです。

里親制度の推進に一定の実績



撮影：北田英治

「児童養護施設 八代ナザレ園」 — “小規模グループケア”の新しいモデルとして

八代ナザレ園 施設概要

児童養護施設（定員51名／内地域小規模6名／スタッフ38名）
熊本県八代市竹原町1447番
敷地面積：7,316.48㎡／延床面積：1,897.91㎡
2015年3月移転改築・事業開始
設計：藤木隆男建築研究所／施工：松島建設株式会社

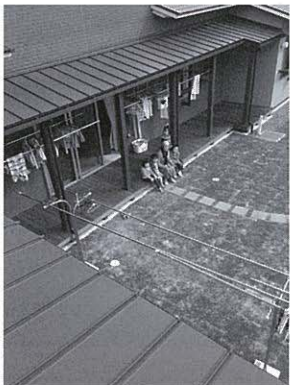
1900年、シャルトル聖パウロ修道女会から派遣され来代した3人のスール（修道女）により開始された奉仕事業（孤児院、施療院）以来、今年で115年の長い歴史をもつ児童養護施設が、小規模グループケア、という最も新しい養護スタイルの施設に生まれ変わりました。それは、厚生労働省が推進する児童の養護ビジョン「社会的養護の課題と将来像」にその根拠をおいています。ここ「八代ナザレ園」での移転改築事業は、旧園舎でのユニットケアの試行が始まっていたこともあり、それまでの伝統的な大舎制・集団養護からの転換は比較的スムーズに行われました。

ナザレ園型、小規模 ケアユニット／児童棟

（物干しスペース）を回し、芝生の中庭に開いています。また高さの違う2つのユニットは、単調な繰り返しになりがちな施設建築に、変化のある場所とスカイラインをもたらしつつ意図されています。

夏向きの片付いた家 として

新園舎の建築は、木造在来工法／カラーベストシングル葺き・勾配屋根／アルミサッシ・サイディングパネル張り外装という、一般的な既製住宅に準じた相親をもっています。それはローコスト化が条件であったためでもありますが、むしろ地域景観への調和、同調という積極的なデザイン戦略の結果でもありました。新園舎を上空から俯瞰する時、あるいは敷地全体を遠望する時、あたり一面の広大な水田地帯から新興住宅



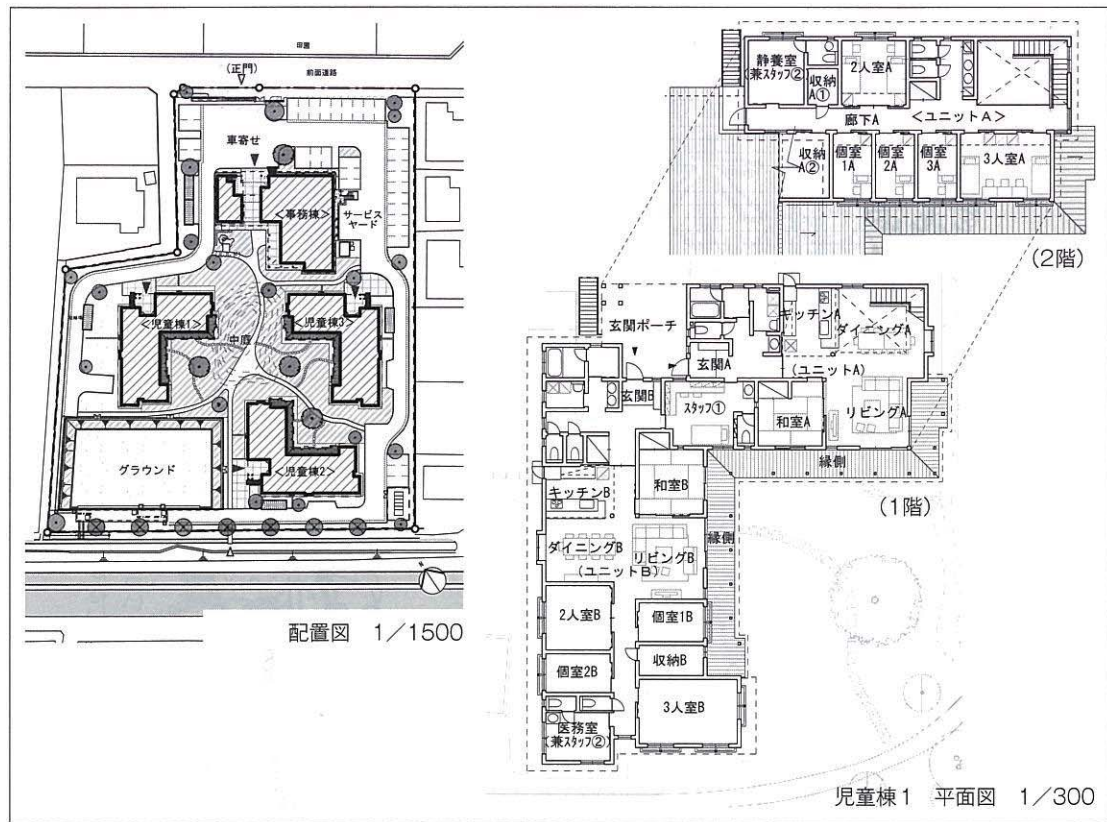
右頁：「L字型児童棟」に囲まれた芝生の中庭
本頁右上：田園地帯の「新集落」としての新園舎建物群（俯瞰全景／遠くに九州新幹線）

左上：のどかな園庭風景

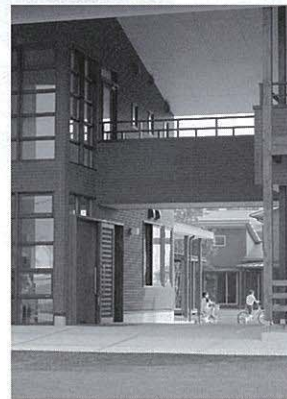
左下：昼下がりの縁側で話をする子どもたちと富田園長（藤木隆男建築研究所撮影）

右下：八代市中心部にあった鉄筋コンクリート造3階建の旧園舎（八代ナザレ園提供）

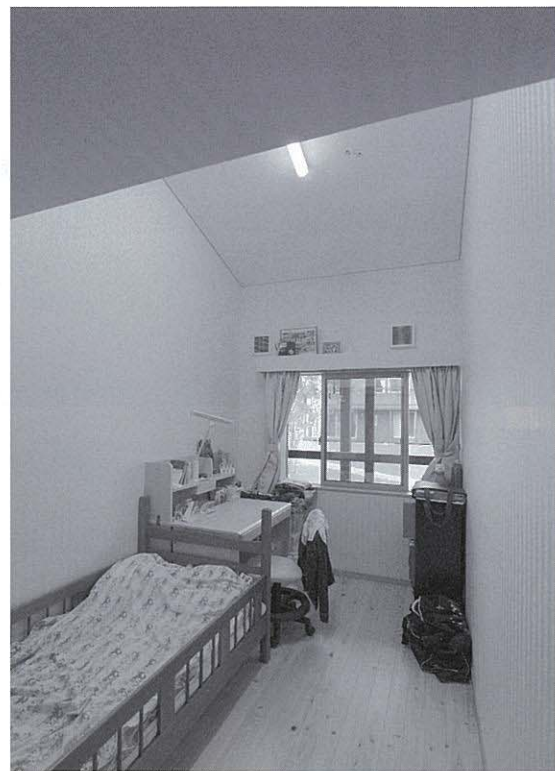
定員45名、6〜8名／1ユニットの小規模ケアの場合、ユニットは通常おおむね「6LDK〜8LDK／約150〜200平方メートルの家」となります。私たちはその建築モデルとして、平屋と2階建の2つのタイプをつくり、それをL字型に連結して1つの住棟「児童棟」とする、いわば「ナザレ園型」児童養護施設の建築を提案しました。それぞれのユニットにある静養室（兼スタッフ室）に加え、L字の結合部にもう1つのスタッフ室（書斎／宿直室）を配置しています。それは、2つの家庭的な子どもの生活領域を自立・完結しつつユニット双方へのスタッフ動線を確保し、夜間のケアやユニット間相互の養育上のバックアップを可能にし、宿直勤務負担を軽減するための仕掛けです。L字の外側コーナーに車を横づけできるピロティ状のポーチ（2つの玄関）を設け、内側には縁側



右：児童居室（個室）
左：夕食前のリビング・ダイニング（八代ナザレ園提供）



左下：事務棟は「ナザレ園のゲート」。左が玄関・事務室、右が親子訓練室・憩いの部屋



幸い八代ナザレ園では、旧園舎のセントラルキッチンでの調理担当スタッフを各ユニットに配置することにより、「数」の問題に対応しつつ、「食」の水準維持に功を奏しています。

また、ユニットの隣同士で調味料や食材を融通し合ったり、別の「ご近所」のユニットのスタッフにお風呂に入れてもらう約束をした幼児がいる、各ユニットの玄関を回って幼児を車で送り迎える新しい登園風景など、新体制の園舎に移転、開設して間もないこの「ユニットケアの子育て力」は、低下も孤立化も来していないように見受けられます。

四面採光の新ユニット建物の明るい室内は、子どもたちに一定の安心感を与えるのか、日中照明は点灯せずに済んでいるし、彼らは早くも旧園舎から使っていたユニット名「肥後六花（つばき、さざんか、あさがお、きく、しゃく

地へと様変わりしつつある八代市竹原町の田園／家並み景観とすでになじんで明確な区別がつきません。つまり、小規模ケアユニットの建築スケールが地域のそれと大きく変わらないものであり、ここの子どもたちは見慣れた風景の地域／家に住み、そこから学校に通うのです。

しかしこの新園舎の建築的個性は、「深い軒・庇」「木製の十字型フレーム手摺の付いた大きな窓」「全館地場産の桧無垢フローリング張り・い草の畳表」などに表れています。それらは、「夏・冬の日射コントロール」「子ども部屋の採光・風通し／安全／開放感」「清潔で、裸足の足触りのよさ・温かさ」など、日本の家屋が備えるべき居住条件「住まいは夏を旨とすべし（『徒然草』吉田兼好）」の教えに従っています。

また、建物各部に倉庫・収納を十分確保した「片付いた家」で

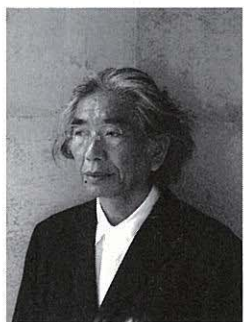
新天地でスタートした子どもたちの新しい暮らし

あることも配慮されました。

当初から施設小規模化へ向けた改築計画をすすめるにあたって、最も大きな懸念材料は、養護スタッフの絶対数不足、勤務体制の大きな見直し、経験の浅い養護スタッフの孤立化による心身の負担増、各ユニットでの慣れない調理技術などでした。最近、スタッフ数／児童数の制度的配置比率基準が、1/5・5から1/4に変わろうとしています。この急な制度改革がそのまま直ちに養護の現場の問題点の解消に結びつくわけではなく、実際にふさわしい人材を必要／可能数だけ一挙に補充・確保することは、人手不足の今日、少なからず困難なこととされているようです。

やく、はなしょうぶ」の6つのユニットをそれぞれ「自分の家」と感じ始めている様子だといえます。ホールや園庭での地域とのさまざまな交流もすでに始まっています。

このように園長をはじめスタッフ全員的一致団結の万全の準備が、このたびの移転改築事業を見事に成功させたのです。シラサギが飛来する緑の田んぼに囲まれて、八代ナザレ園は「次の100年」をめざして、希望に満ちた力強い新生活をスタートしています。



たかお 隆男
ふじき 藤木
建築家
藤木隆男建築研究所
代表

筆者の関わったいくつかの改築事例を通して、計画の意図、事業の実際、子どものためにつくられた生活空間／環境、問題点と展望などを、実務的実践的に解説し、今後の施設づくりの参考、指針になることをめざします。



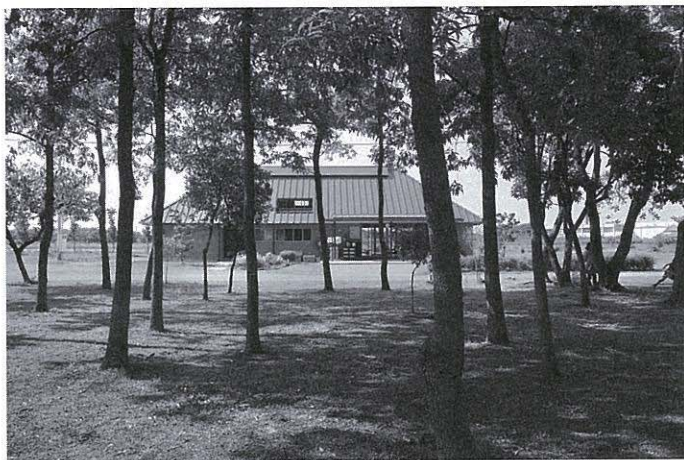
撮影：北田英治

「放課後児童クラブ 永添児童クラブまりあ」 — “群れて遊ぶ場”の確保

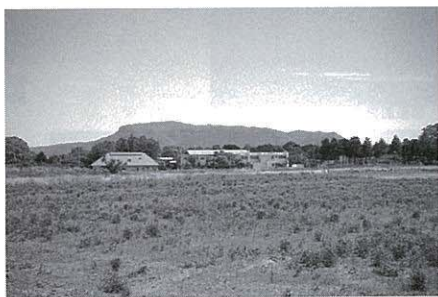
永添児童クラブまりあ 施設概要

放課後児童保育施設（定員40名・小学1～3年生／スタッフ：放課後児童支援員4名）
大分県中津市永添
敷地面積：101.084.73㎡（内社会福祉法人45.623.73㎡）／延床面積：229.38㎡／総工費約5.4千万円
2013年5月改築
設計：藤木隆男建築研究所／施工：高野建設株式会社

これまで4回にわたり、「児童養護施設における子どもの福祉的生活空間／環境」について、改築事例を通じて事業の経緯、施設建築の計画や空間構造、その後の子どもたちの様子などを紹介してきました。今回の放課後児童クラブ「永添児童クラブまりあ」（以下、まりあ）は、その4回のうちのひとつ。社会福祉法人聖ヨゼフ寮が児童養護施設敷地内に整備した「地域・家庭子育て支援施設」です。『まりあ』は1999年創設ですが、当初本園「児童養護施設」の二画にあつたため、その「聖ヨゼフ寮」改築にともない、園内の古い建物や小規模なプレハブなどの「仮住まい」でしのぐ我慢の時期が長く続きました。しかし2011年、満を持して自己資金による改築計画が始まったのです。それは、大都



右頁：家の周りの木漏れ日空間で遊ぶ子どもたち
本頁右上：雑木林越しに見る建物正面全景
左下：広大な牧草地の中の寄棟造りのまりあ遠望。
児童養護施設「聖ヨゼフ寮」、体育館、サレジオ修道院に隣接している
右下：創設当初のまりあ。「聖ヨゼフ寮」旧園舎の中の一室（2000年頃、聖ヨゼフ寮提供）



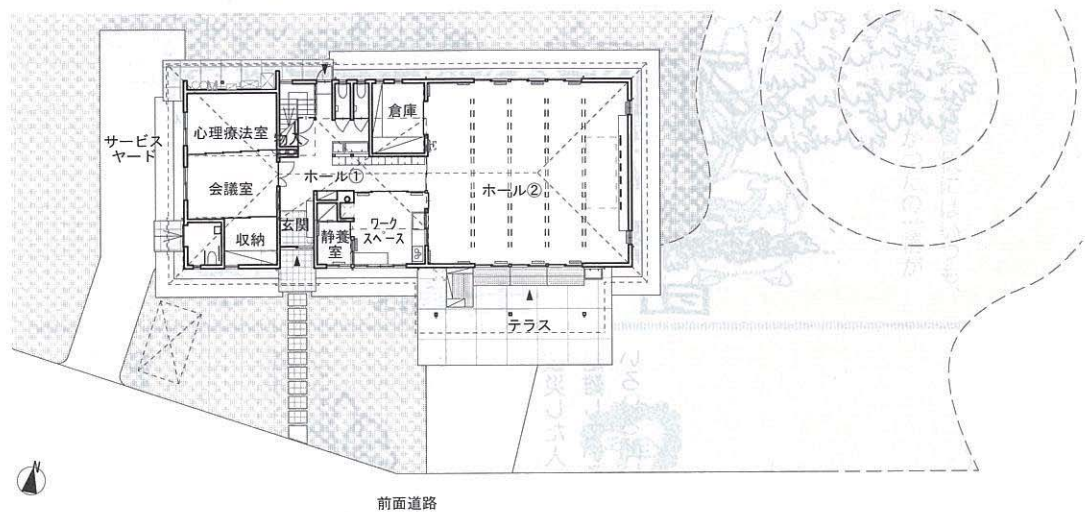
市と地方都市／地域のいかに問わず、昨今のわが国の社会・経済／家庭・家族構造の変化にともない失われてきた、地域の子ども集団の居場所、確保への、法人の鮮明な使命感と地道な活動歴を体現すべき「夢の舞台」だったので。

「寄棟造り」 — 家のカタチ

まず、まりあの保育空間のほかのどこにも引けをとらぬ自慢は、広大で自然豊かなその外部空間と言えるでしょう。それは、施設直近周囲の花壇や芝生、遊具に始まり、雑木林／巨大な景観木、牧草地から田園風景へと同心円状に広がる「たぐさんの外遊びの小宇宙」です。建築としてのまりあは、この恵まれた敷地条件のただなにつくられた「シンプルなホール空間」なのです。

中津市の「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準を定める条例」では、「面積おおむね1・65平方メートル／人以上、当該育成事業の専用区画をもち、衛生および安全が確保されたもの、2名以上の放課後児童支援員を配置した事業所であることを一定の経過措置つきで求めています。これに加えて、計画に際して法人が示した建築条件はひとつ、「二軒の大きな家」でした。私たちはそれに、在来工法木造平屋建（一部2階）、「寄棟造り」の大屋根の建築で応答しています。それは、子どもたちが、放課後最初に帰る（そこで夕方までお迎えの保護者を待つ）家」を「ひとつの建築的原型」として表現しようとしたものです。

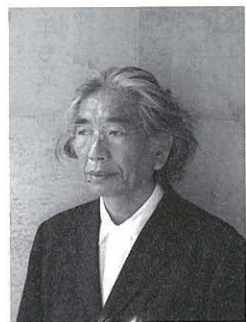
大きな屋根の下は、単一の「ホール空間」です。隣接するスタッツ室兼キッチンからよく見通せるそこは、おやつ、読み聞か



前面道路

配置図兼1階平面図 1/300

野球が、ボール当て鬼ごっこ、砂遊びが人気です。ほかに、野球やサッカーの練習、長縄飛び、ごっこ遊び、等をしています。また「お絵かき」をしたり、「ウサギの『きなこ』とゆっくり過ぎ」子どもいます。1年生の子どもたちも『まりあ』での生活に慣れてきた様です。上級生が声をかけてくれるので、遊びに入りやすい様です。2年生は、「〇〇しよ〜。」と声をかけて、上手に遊びに誘っては、いつも『まりあ』を盛り上げて来ています。よくお手伝いもしてくれます。3年生は、ルールやマナーを優しく下級生に教えてくれます。リーダーシップをとり、みんなが楽しく遊べるように考え、行動しています。優しく頼りがいのある素晴らしいリーダーさんです。最近では、違う学年の子ども達と遊ぶ機会や場所が少なくなりました。年齢が違う沢山のお友だちと、体を使って自然



たかお 藤木 隆男
建築家
藤木隆男建築研究所 代表

の中で思いっきり遊び、切磋琢磨しながら成長していくことができるとの環境を、これからも大切にしていきたいと思えます……」
2014年度に、この施設を利用した子どもの数は延べ7220人(平均26人×活動日数279日)であったとのこと。成長していく子どもたちのなかに、「群れて遊んだ体験」と「寄棟の家のカタチ」がひとつの原風景となつて記憶されれば幸いです。



上：ホールで思い思いに過ごす子どもたち。正面左奥がスタッフ室／キッチン
右下：建物に併設された「ヨゼフ寮」の心理療法室
左下：ホール前のテラスで記念撮影



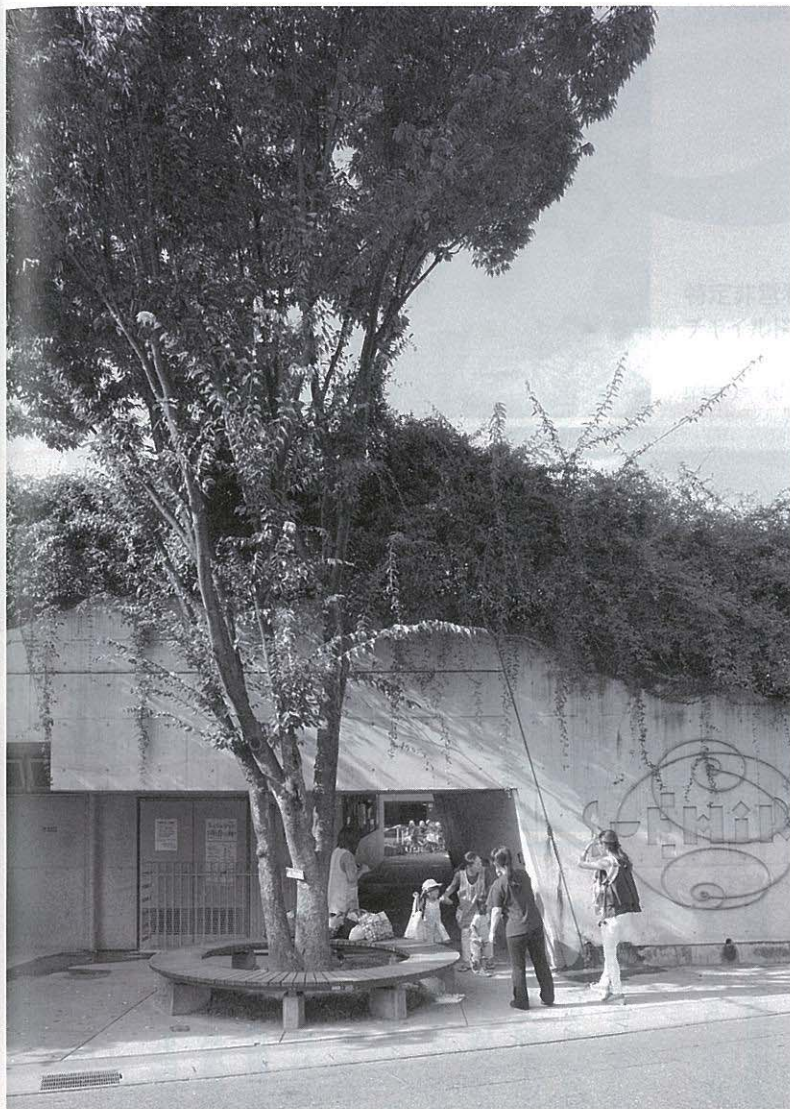
「群れて遊ぶ場」の日々

このまりあ施設内外にしつらえられた放課後の子どもたちの居場所の様子を、指導員リーダーの岩久さんは、「保護者への手紙」『まりあつうしん』平成26年5月号で次のように発信しています。「……全体としては、サッカー、

せ・宿題、室内遊び、劇や集まりなどのほとんどの活動を担う合掌構造の吹き抜け空間です。またこのホールには、金属板葺き大屋根への太陽光の熱エネルギーを回収する「床下暖房・換気システム」を導入し、冬季足元の冷たくない活動フロア／室内温熱環境を実現しています。そこは、自然豊かな外遊びの場と対になった「子どもたちが自由に遊べるもうひとつの小宇宙」ともいえるスペースです。

筆者の関わったいくつかの改築事例を通して、計画の意図、事業の実際、子どものためにつくられた生活空間、環境、問題点と展望などを、実務的・実践的に解説し、今後の施設づくりの参考、指針になることをめざします。

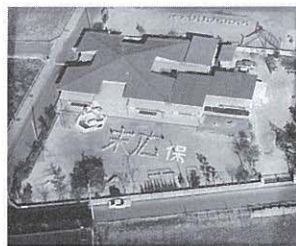
「末広保育園・デイサービスセンターふくじゅ」 — 地域福祉空間のエンドレスな構造



撮影：北田英治

「末広保育園・デイサービスセンターふくじゅ」は、遠く西に伊吹山を望む濃尾平野ののどかな郊外にある市街地で、北側に小学校が隣接する平坦な敷地に計画されました。もともと町中の寺院境内で農繁期に子どもを預かる小規模で慈善的な幼稚園だったものを、1974（昭和49）年に現敷地に移転して社会福祉法人として開設された木造平屋建て旧園舎の全面改築です。

この時以降、保育規模の拡張だけにとどまらず、新たなプログラムとして「異年齢・障害児・一時・延長保育」などを積極的に取り入れ、いわゆる「生きとし生けるものをあまねく広く受け入れようとする」弘法大師の仏教的教えに基づいた保育所として進化してきました。またその際、北



右頁：保育園正面入り口。登退園はトンネルを抜けて……
本頁左上：起伏が多く、よく緑化された園庭で遊ぶ子どもたち
右上：改築前の「亀の子」型プランの旧園舎（1975年頃／末広保育園提供）
右下：園庭側全景（改築竣工時）（撮影：新建築社写真部）
左下：園庭に開いたデイサービスセンターの食堂テラスでのふれあい

末広保育園・デイサービスセンターふくじゅ 施設概要

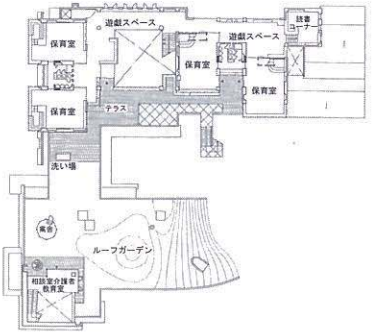
- ・認可保育所・デイサービスセンター（定員200名・35名／スタッフ30名・9名。スタッフのうち数名は卒園生の父母）
- ・愛知県一宮市末広
- ・敷地面積：2,461・44㎡／延床面積：1,539・50㎡（うち保育園1,237・26㎡・デイサービスセンター302・24㎡）
- ・1998年5月移転改築
- ・鉄筋コンクリート造・地上2階
- ・総工費約3億8000万円
- ・設計：藤木隆男建築研究所／施工：矢作建設工業株式会社

欧やオーストラリアなどでの福祉環境の視察・スタッフ研修での知見を活かし、さらなる課題であり時代の要請でもある「高齢者福祉事業を併設、複合／合築する」とことが計画されたのです。それらは、「地域子育て支援／在宅高齢者福祉の融合」をめざす事業主の理想のカタチでした。

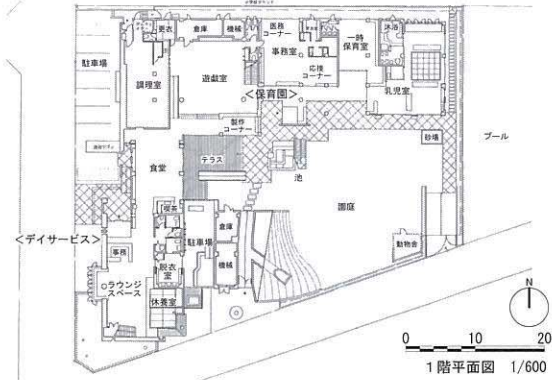
「双方にとって望ましい「接地性」

ところで、子どもと高齢者のための両施設にとって、町や園庭などのオープンスペースとの直接の関係性「接地性（地続き）」は欠かすことのできない計画上の要件であると思われまます。

しかし限定的な敷地面積と外部空間を含む盛りだくさんの計画プログラムとの兼ね合いから、ここではデイサービスセンターと保



2階平面図 1/600



1階平面図 1/600

右頁右上: 保育室コーナーの階段は「読み聞かせ小劇場」
 左上: 吹き抜けの遊戯室での午睡
 左下: 保育室内に掘り込まれた穴倉「デン」で遊ぶ
 本頁右上: 町の中の「森」と化した現在の保育園。南側全景

(はたらきかける設えや環境と、そこから反映される刺激や感情)としての建築環境です。それは子どもにも高齢者にもこびず、しかしやさしい「営業Ⅱ福祉生活空間

育園の一部(乳児室、一時保育室、遊戯室など)を優先して1階に配置し、その他の保育諸室を2階としています。そこで、1階の

デイサービス屋上に土を盛り緑化して「屋上園庭と地上の主園庭」を大きな土の斜面でつなぐことにより、「2階保育室保育環境の地面からの遊離」をできるだけ補おうとするものです。

およそこの世の生命環境が「輪廻・人や生き物の生と死(魂)の生まれ変わり」や「曼荼羅・仏の世界観」のようにエンドレスな構造をもつとすれば、その一部であるこの施設建築も、そこに生きる子どもや高齢者の存在や行為をつなぐ内外部にわたる連続構造を実現し、表現しようとしているのです。

アフオーダンスとしての各部造り込み

この施設の建築/空間は陰や襷、高低差や肌触りに満ちています。登園口は人工的に盛られた土の斜面をくりぬいたトンネル状の細道、ウサギや亀や小鳥、ナンジャモンジャの木(ヒトツバタゴ)を中心にした100種類以上の高木や藪のようなかん木、外階段の下の木製デッキテラスとひな壇状の池。保育室の中に設えられた「デンとロフト(階段下の穴倉と上の屋根裏スペース)」、小さな段差、吹き抜け、下がり天井。デイサービスと保育園の連結部に設けられた集中形式の小劇場のようなホール/遊戯室など。

それら建築内外にわたるたくさんの造り込み(そのほとんどは、福祉の理想を追求する園長・施設長である真言宗寺院住職ご夫妻のアイデアと夢の実現)は、子どもや高齢者のすべての行動にとって豊かな「アフオーダンス

づくり」の試みなのです。

異年齢保育、複合/合築の意味 — その日常と今後

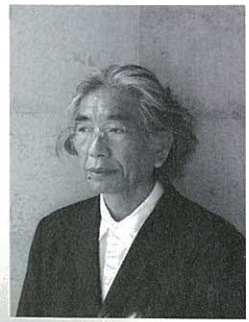
末広保育園は、「異年齢保育」に力を入れています。現在その7つのクラスは、Cat・Bear・Pig・Monkey・Dog・Horse・Rabbit

という名称ですが、去年は「赤ずきん」「かさじょう」「きんのがちょう」など童話のタイトル、その前は国名や星の名前だったとか。毎年クラス編成され、新しいメンバーによる「思いやりと助け合いの小規模集団生活」を送ります。

保育園とデイサービスセンターが併設されていることの意味は、互いの日常生活の自立性を確保しつつ、プログラム化された強制的な行事ではなく相互にその存在を意識できる程度の「緩やかな接触」です。それは、高齢者の生

活エリアから垣間見える、園庭の子どたちの遊ぶさまや常に聞こえてくる歓声、5歳児5〜6人ずつ交代で高齢者の昼食に緊張した面持ちで参加する「ふれあい給食」のひと時といった程度ですが、それらが高齢者には十分に元気の源になっているようです。

ちなみに高齢者支援は、その後、通りの向かいに「小規模多機能居宅介護事業所」を開設し、高齢者福祉事業のさらなる充実、展開が図られています。



お 藤木 隆男
 建築家
 藤木隆男建築研究所 代表

筆者の関わったいくつかの改築事例を通して、計画の意図、事業の実際、子どものためにつくられた生活空間／環境、問題点と展望などを、実務的・実践的に解説し、今後の施設づくりの参考、指針になることをめざします。

「国府台保育園」 — 神は小さきもの／地域に宿る



撮影：北田英治

千葉県市川市、西に江戸川を見下ろす河岸段丘上の高台に国府台^の地域があり、その一角の古くから桜の名所として知られる旧国府台城跡／市立里見公園に面する場所に「国府台保育園」は位置しています。

前身は、1930年代に米国福音ルーテル教会宣教師エーネ・パウラス師により始められた「虚弱児童養護所」でしたが、戦後間もなく国府台保育園として開園し、認可された長い活動歴をもつ保育所です。

旧陸軍兵舎を借り受けた最初の木造園舎、高度成長期1970年代の改築による園舎に続き、このたびの満を持しての新園舎の整備です。それは、「1棟の建物とそれに南面する緑陰の園庭」に統合し、機能的で高いQOLを有す

る子どもの保育環境を再編成するというもくろみでした。

複雑な敷地条件と建築的応答

このケースは、計画敷地が公園や医科歯科大学・国府台高校という大きなオープンスペースと周辺戸建住宅に囲まれた比較的緑豊かで落ち着いた地域環境に恵まれているものの、母子生活支援施設と保育園というふたつの児童福祉施設をもつにもかかわらず敷地面積が約4000㎡に限られ、形状がやや不整形である、という条件下での計画でした。

加えて、計画当初は「保育園＋母子生活支援施設」複合1棟の中高層建築物による一貫した整備が構想されましたが、公的補助制度（安心子ども基金）の適用上、まず保育園だけの整備となり、既

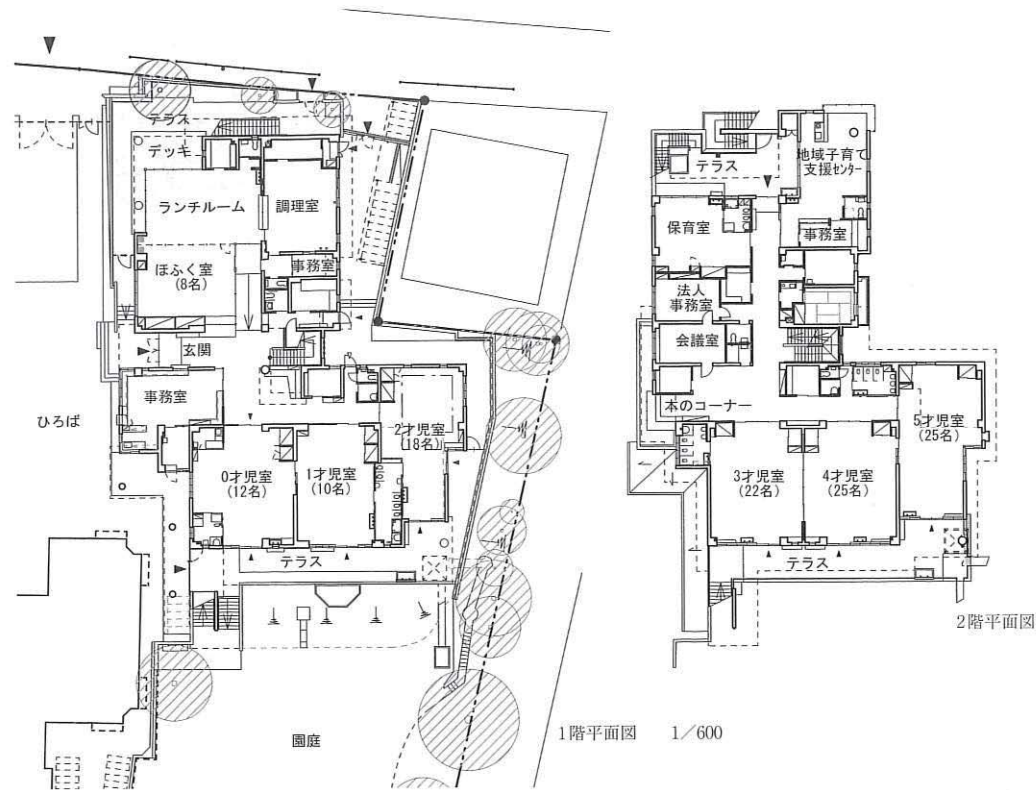


右頁写真：昼食から午睡へ、それぞれの子どものペースでの移行
本頁右上：午前中緑陰の園庭で遊ぶ子どもたち（1・2歳児）
西側は隣接して工事中の母子生活支援施設
右下：園庭とスキップした1階保育室前デッキテラス（縁側・登退園路）
左下：ランチルームでのクラスごとのにぎやかな3～5歳児の昼食風景（アジフライの南蛮漬け+具だくさんのひじき煮物+わかめスープ+ごはん+麦茶）



国府台保育園 施設概要

認可保育所（定員120名／スタッフ31名・内非常勤9名）
地域子育て支援センター・一時預かり／特定保育（定員12名／スタッフ2名）
千葉県市川市国府台2-9-13
敷地面積：4010.74㎡／延床面積：1286.36㎡
鉄筋コンクリート造・地上2階
総工費：約3億2000万円
2011年3月改築
設計：藤木隆男建築研究所／施工：旭建設株式会社



右上: エントランスホールにつくり込まれた絵本コーナー。左は事務室、奥は遊戯室
 右下: 大きな可動木製パネルで仕切られた3・4歳児保育室
 左上: 「地域子育て支援センター」での母親たち
 左下: プレイルームで行われる年長年中組「幼児礼拝」(保育園提供)
 中央: 母子生活支援施設の整備後の敷地全景 (模型写真: 藤木隆男建築研究所)

存の母子生活支援施設を継続しながらの改築整備となった経緯があります(母子生活支援施設は2016年3月に「次世代育成支援対策施設整備」により完成予定)。

蓄積された 保育ノウハウに従って

保育園の建築は、長年蓄積された現場の保育ノウハウと、熱心なスタッフへの頻回・入念なヒアリングに基づいて忠実につくられています。補助制度上の整備基準を満たしつつ、必要かつ実際の運営上の合理性や使い勝手においてできるだけ満足する室配置・動線、各部の造作・空間が追求されています。それは特に、保育室周りのトイレや調乳室、収納などの各部構造、子ども用ロッカーや手洗い流しなどの造り付け家具の詳細にわたるものでした。私たちはその

保育経験による意見を安心して受け入れ、その綿密な実現に集中した一方、得意としている設計手法・木質系/住宅的居住性の子どもの生活空間/環境づくりを追求できたのです。改めて、この保育園建築の要点は次の通りです。

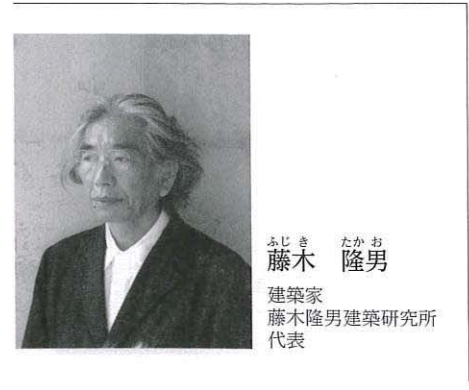
1. 南側園庭に面する1・2階に「0〜5歳児までの保育室6室(現在1歳児室と2歳児室の2室を1・2歳児室×2室として使用)」を配置、前面に「縁側スペース兼登退園口」としての深い庇と木製デッキテラスを整備。通り/公園に面する北側に屋外からも直接アクセス可能なランチルーム(調理室)、子育て支援センター・一時保育室・特定保育室を配置した平面計画。
2. 公園前の道路から奥の園庭まで、敷地の奥行きは約45m、高低差2・5mほどの南上りの緩やかな斜面にまたがって計画する長大な低層建築になるた

2015年 年主題 平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれるーマタイによる福音書5章9節。 年主題・「平和をつくる」6月主題・乳児/わくわくする幼児/おもしろい。いま、各クラスでは野菜やお花の種を蒔いて成長を楽しみに観察しています。これから水遊びや泥んこ遊びも始まります。わくわくする気持ち、面白いをたくさん見つけて経験することで心が豊かに育っていきます。子どもたちの「おもしろかった」のお話がおうちでたくさんされると嬉しいです...

3. 広葉樹による木質系床・建具・家具による「設え(清潔であたたかいがにぎやかではない)、十分な自然採光/換気、太陽光発電、雨水貯留などによる自然で環境共生的な建築計画」。

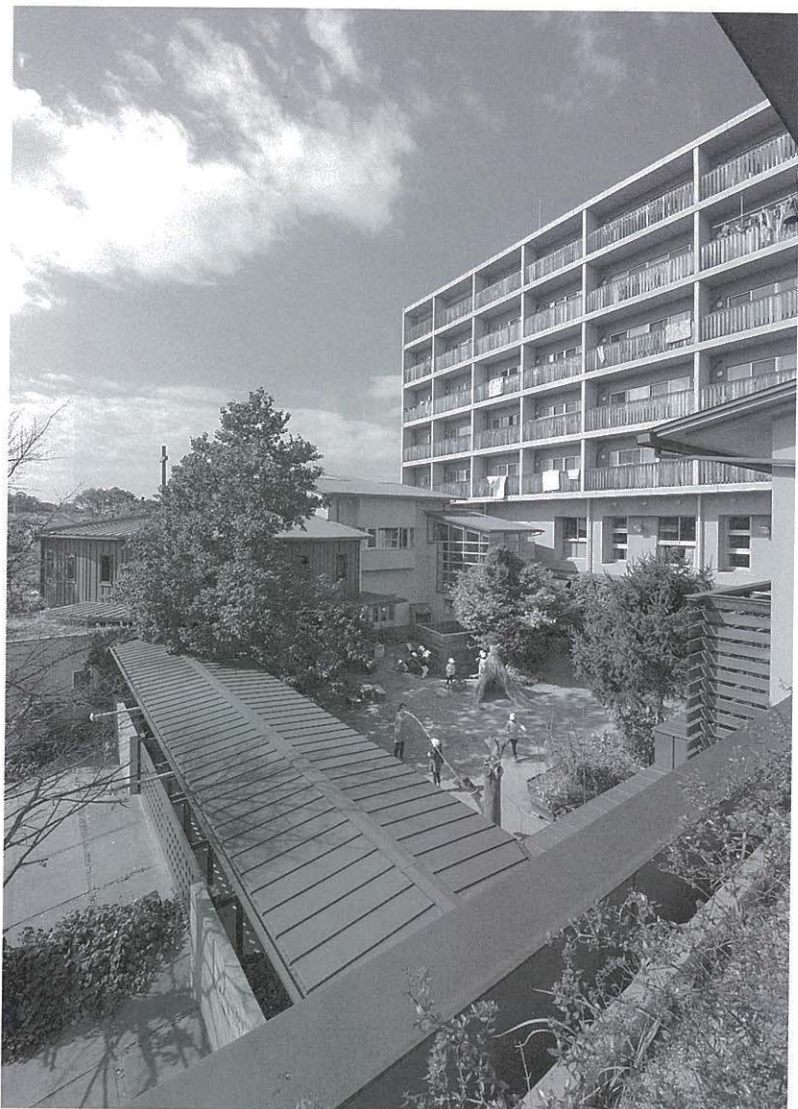
神は小さきもの 地域に宿る

2015年6月の「園だより」の一節が、この保育園の理念と活動を物語っています。



「旭ヶ丘保育園・母子ホーム」

「NOA Home」ファミリーサポートシステムの構築①



撮影：北田英治

本号および次号（2016年1・2月号）で取り上げる「旭ヶ丘保育園・母子ホーム」は、前号の「国府台保育園」と同じ「社会福祉法人千葉ベタニヤホーム」の経営する児童福祉施設です。保育園と母子ホームはそれぞれ自律した活動を展開してきましたが、施設改築整備の機会に「合築」を行い、より専門性が高く、より豊かな施設環境で「地域・家庭の子育て支援」のニーズに応じていこうとする試みです。

三位一体のファミリーサポート

改築計画当時すでに、社会では児童虐待やDV、養育困難、女性の社会進出など、家庭を取り巻く

多くの課題が顕在化していました。「社会的な養護／子育て」により社会福祉施設が子どもを支え、守り育ててゆくシステムを早急に構築し、実施されることが求められていました。しかしそれは当該施設にとって、施設建築の老朽化とともにその10年以上前からの念願であり、これに敷地（国

有地の借地）の問題の解決、行政の理解と積極的な協力・援助、長年培ってきた地域貢献・相互理解などが相まって、大掛かりな改築の実現を見ることになりました。しかもそれは、「地域・家庭の子育て支援の総合的な『ファミリーサポートシステム』づくり」に事業主・法人、行政、地域が「三位一体」になって熱心に取り組んだ結果、初めて可能になった稀有な事業であったといえるかも知れません。本号ではまず「旭ヶ丘保育園」から紹介します。

戦略的空間／設え

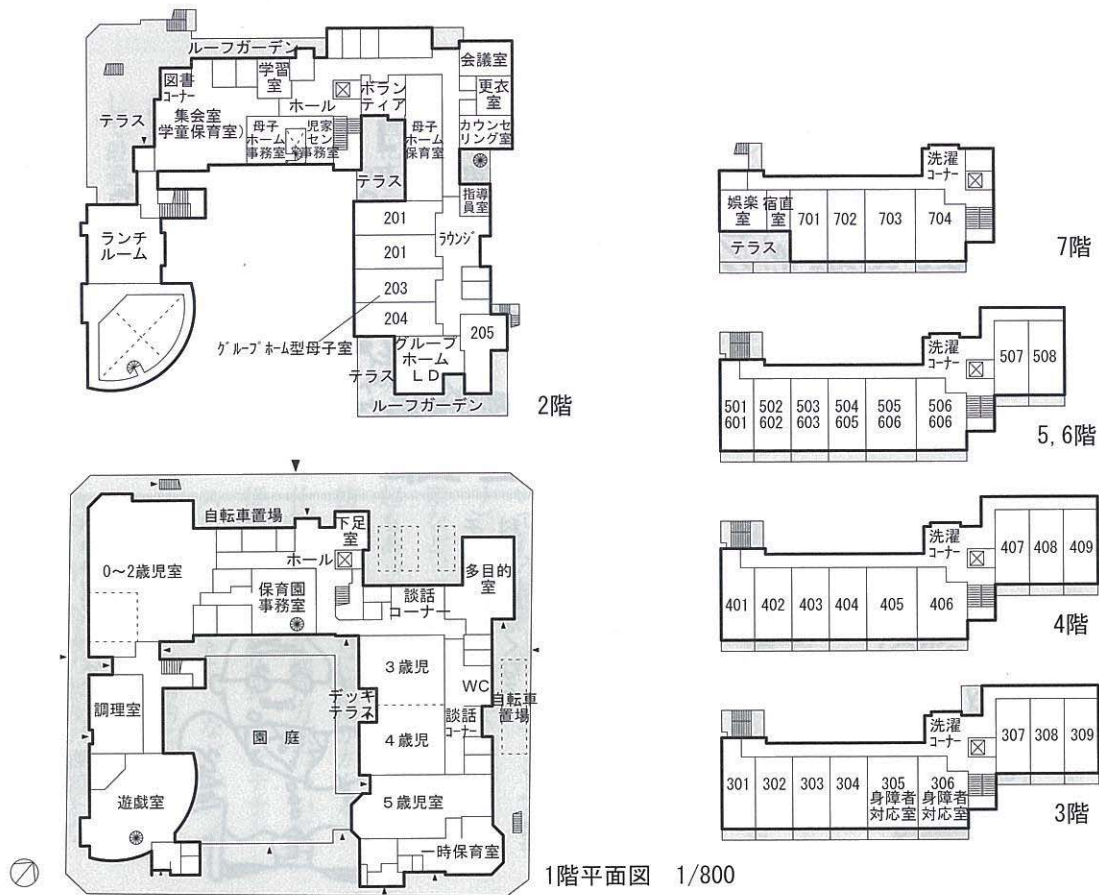
敷地は必ずしも広いとは言えませんが、4面道路、南に児童公園、北側にJR総武本線と対峙し住宅地に囲まれた、整形形で緩やかな南下がりの勾配をもつ恵まれた条件です。



右頁：園庭を囲む保育園と、母子ホーム南側の外観全景
本頁右上：デッキテラス／回廊端部の登園口。右側は5歳児室の出窓
右下：年中組のプリミティブな構造の保育室。昼食から午睡風景
左：児童公園に向かって開かれた園庭

「旭ヶ丘保育園」施設概要

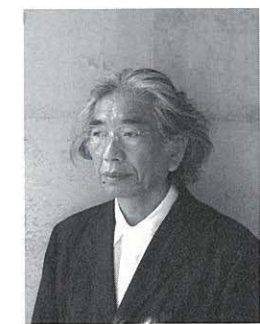
認可保育所（定員120名／スタッフ：38名・内非常勤5名）
延長保育・一時保育／障害児保育
千葉県千葉市若葉区
敷地面積：2,174.43㎡／保育園床面積：961.90㎡（建物全体延床面積：3,863.23㎡）
鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・地上7階（保育園は1階、一部2階）
総工費約8億円（建物全体）
2007年3月改築
設計：藤木隆男建築研究所／施工：清水建設株式会社千葉支店



戦後、山梨県から移住してきた開拓農民団によりつくり始められた村「都賀」の、休みなしの畑仕事に追われる農家の子どもを預かる「託児所」としてスタートした旭ヶ丘保育園ですが、法制度整備以前からの「ファミリーサポート」の精神は、今に引き継がれています。それは、地域を耕すというキリスト教的な社会福祉精神の実践であり、地域への奉仕でもあるわけですね。ある年の卒園児の

地域を耕す
キリスト教的な社会福祉の実践

十分に戦略的に構築された保育園施設の構え方と設え方は、園児やスタッフ、そして保護者や地域の人々を常に迎え入れ、よく使い込まれることにより「ファミリーサポートシステム」の夢と理念、方法を体現しつつあります。

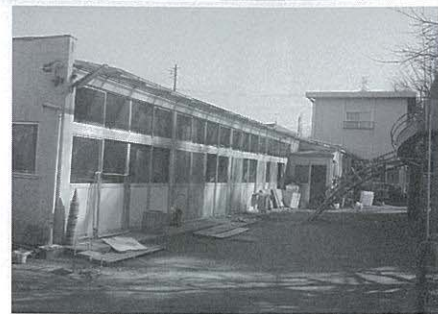


お高 隆男
たかお 隆男
建築家
藤木隆男建築研究所
代表

保護者が園長に宛てたクリスマスカードには、次のメッセージが見られます。地域住民もまた施設をサポートしているようです。

「園長先生へ、いつも温かく接してくださってありがとうございます。また、いつも励まして、自信と元気を付けて頂いてありがとうございます。遠い国から来た私にとっては、保育園が私の実家のように感じ、ほっとします。先生、そして先生のご家族に、すてきなクリスマスと素晴らしい新しい一年が訪れますように。」

（もも組 李琅瑛ママ 葉玉美 2008年12月19日）



右上：段差やコーナー、ロフトのある不整形な空間の5歳児室
右下：2階ランチルーム。右調理室、手前は1段下がったオープンカウンター
左上：遊戯室／地域交流スペース「森のホール」
左下：旧園舎園庭側外観（2007年頃）



ただ、120名定員の保育園、40世帯の母子生活支援施設と児童家庭支援センター、地域交流施設、学童保育施設など、「ファミリーサポートシステム」を積極的に実現するための盛りだくさんの事業メニューを、建ぺい率・容積率制限内で計画するには、いきおい中高層化する必要がありました。そのなかで高い接地性が求められる保育園は1階（ランチルームのみ2階）に配置され、施設全体は公園と4面道路に向かってそれぞれの目的に応じた4つの小玄関をもち、地域とつながっています。

採光・通風を確保し、また登退園、館内移動、保護者の送り迎えをスムーズにするため、各室を「公園に開かれた園庭を長く囲むコの字型」に配置し、各室の縁側でもある木製デッキテラス状の回廊で結んでいます。その中央、要の位置に事務室、両翼に各保育室、南側両端に遊戯室（「森の

ホール」と一時保育室（「つくし」と和室（道／街に開いたCAFÉとSHOP）」という配置です。園児が1日中往来し、よく磨きこまれたイペ材のデッキテラスと、「土の園庭」につくり込まれた菜園や成長した樹木、低層部の屋上緑化は、公園と調和し、みずみずしく成熟しつつある保育空間・環境の質をよく表しています。

鉄筋コンクリート構造の建築ですが、室内床・腰壁、建具・造作、保育家具などは木質系の住宅的素材で設えられています。また0〜2歳児室、3・4歳児室および5歳児室はプリミティブでフラットなワンルームから、床の段差やコーナー、ロフトといった、次第に複雑さを増す平面や空間構造の部屋に変化します。一方、ランチルームや遊戯室は、町のレストランや小劇場のような楽しく特別な場所がつくられています。

コンパクトではあるものの、

「旭ヶ丘保育園・母子ホーム」 —NOA Homeファミリーサポートシステムの構築②—



撮影：北田英治

※「旭ヶ丘保育園・母子ホーム」は、2007年千葉県建築奨励賞、千葉市優秀建築賞を受賞しました。

前号（2016年1月号）に続き、「旭ヶ丘保育園・母子ホーム」の紹介ですが、本号で扱うのは主として母子生活支援施設部分です。「社会福祉法人千葉ベタニヤホーム」は、県内に6施設を事業展開していますが、「旭ヶ丘母子ホーム」は2007（平成19）年2月、「千葉市小桜園」の運営移管をしつつ、40世帯120名定員、児童家庭支援センター・学童保育クラブを併設して改築整備されました。サービスメニューは、母子保護・地域在宅家庭支援、訪問・来所・電話相談、放課後児童クラブ・子育て短期支援（子どものシヨート・トワイライトステイ）・ひとり親家庭電話相談など多様です。

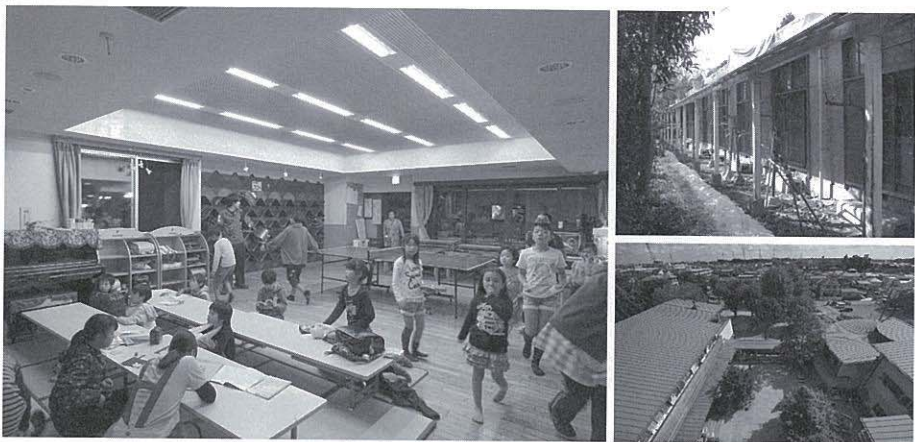
保育／母子福祉の アウトリーチの拠点として

2015（平成27）年、全国母子生活支援施設研究大会シンポジ

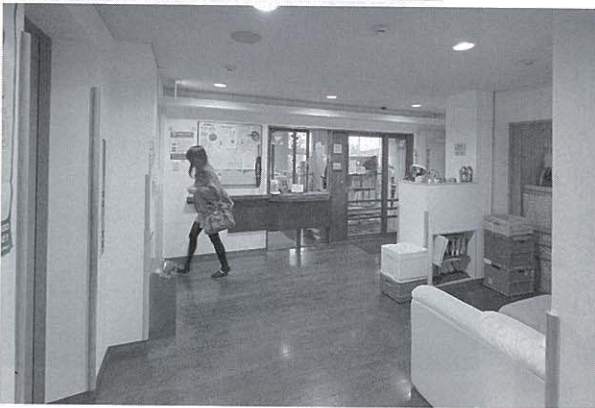
ウムでの友田直人施設長の発表のタイトルは「地域を耕すために、専門性を生かしたアウトリーチの展開」となっています。母子家庭の自立に伴走しながら見守る、崩れゆく母子家庭の継続支援、心の拠り所となる場所づくりなど、母子生活支援施設がなぜアウトリーチを必要とするのか、その事業展開に必要な資源として、①ソーシャルワーカー（ファミリーソーシャルワーカー・精神保健福祉士・児童精神科医師）、②グレイドの高い施設建物／空間と機材、が挙げられています。そこに親しみやすく、豊かで、高品質な施設建築環境の整備が重視されていることが注目されます。

個性的で、 健康な生活空間

保育園との合築施設であり、

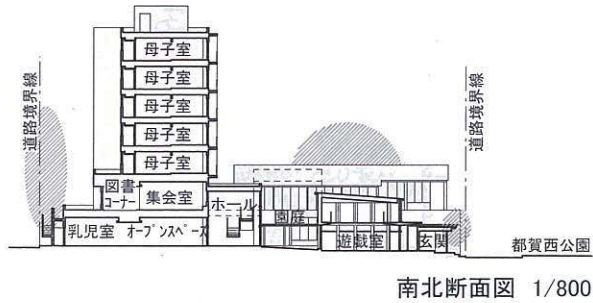


右頁：大きな建物の小さな玄関。母子ホーム北側入り口外観
本頁右上：改築前。平屋の母子ホームテラス側外観（母子ホーム提供／2005年頃）
右中：母子室バルコニーからの眺望。眼下に保育園庭と公園
右下：2階がグランドフロアの母子ホーム。事務室前ホール
左上：にぎやかな放課後児童クラブ室の夕方風景

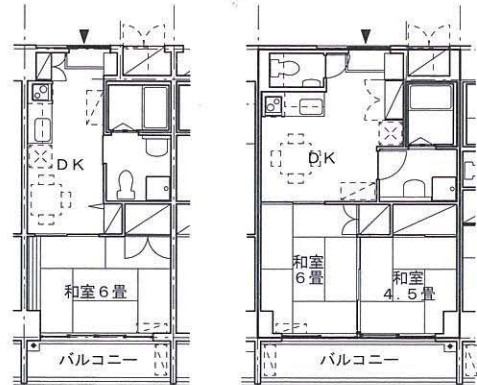


「旭ヶ丘母子ホーム」施設概要

母子生活支援施設
（定員40室+緊急一時3室/スタッフ：17名・うち、児童家庭支援センター4名/非常勤5名）
児童家庭支援センター・地域交流室・放課後児童クラブ室
千葉県千葉市若葉区
敷地面積：2,174.43㎡/母子ホームほか床面積：2,901.33㎡（建物全体延床面：3,863.23㎡）
鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・地上7階（母子ホームほかは2~7階）
総工費約8億円（建物全体）
2007年3月改築
設計：藤木隆男建築研究所/施工：清水建設株式会社千葉支店



南北断面図 1/800

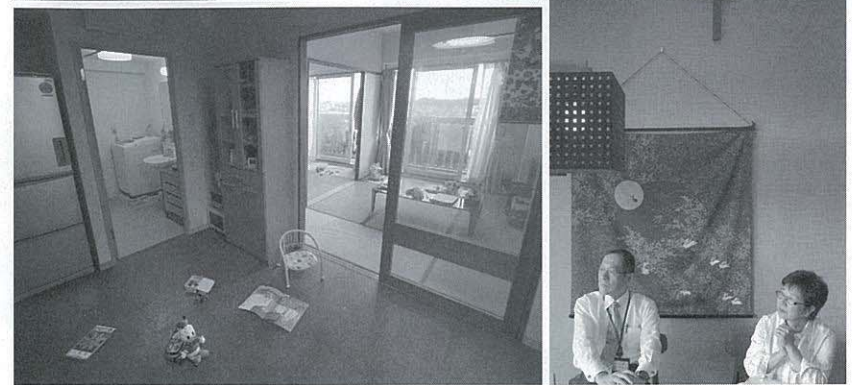
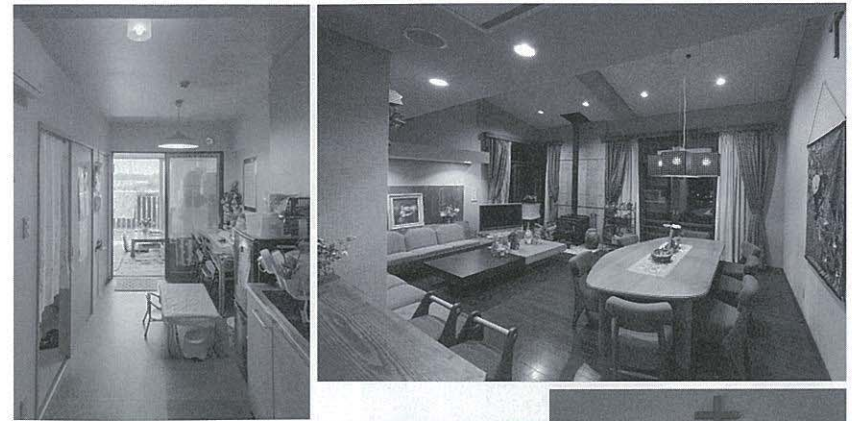


1DK 2DK ユニットプラン 1/200



右頁右上:グループホーム型母子室群の「シャローム」
 右下:母子ホーム施設長と保育園長。友田直人・優子夫妻
 左上:1DKタイプ母子室。DKから6畳寝室とバルコニー
 左下:2DKタイプ母子室。家中が子どもの遊び場
 本頁左下:道と公園に面した地域交流スペース

本誌の取材で訪問した2室は、知的に設えられた2人家族の1DKと、幼児3人を抱える若い家族の、広々と遊び、走り回れるように片付いた2DKでしたが、それぞれに安心して気のおけない暮らしの日々がしのばれる個性的な生活



保育・母子合築施設であるこの旭ヶ丘の理念であり、実践目標でもある「ファミリーサポートシステム」のよりよい構築は、これまでの長年の地道な活動実績と、絶えざる専門的研究成果に基づく戦略的計画・空間づくりによって、なかば実現、達成されようとしているかに見えます。ここでは、放課後児童クラブ卒園児である心理職スタッフの登壇、母子ホーム退所者の地域内県営住宅への入居などに見られるように、「スタッフの顔が見える、つながっている」「利用者が、自分たちの施設」という意識をもてる」という地域に開かれた施設の特性が発揮されています。特筆すべき

スタッフの顔が見える施設

空間の様相を示しています。

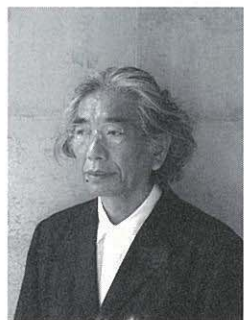
保育園が中庭状の園庭をもつことから、この母子ホームは、7階建ての板状建築の上層部を占めています。つまり、1階は通りから目立たない小振りな玄関+下足室（館内上足）のみであり、2階に事務室や放課後児童クラブ室、児童家庭支援センターがあるランドフロアをもつマンションのような全戸南面片廊下中高層ビル型施設です。児童福祉施設の設備及び運営に関する基準で「30㎡以上/室基準」と定められる以前の整備ですが、30・2㎡/室の1DKタイプから40・8㎡/室の2DK、またはバリアフリー型1LDKタイプ・全40室+緊急一時保護3室の構成で、各階のエレベーターホール・階段室回りに井戸端会議を想定した洗濯コーナー、見晴らしのよい最上階端部に娛樂室、2階にテラス付施設内保育室をもっています。

ひとつ特徴的な試みとして、2階奥に「グループホーム型母子室群（5世帯分）」があります。それは、「近所づきあい」を希望または必要とする家族が、狭い母子室に加えて共用のラウンジスペースや洗濯室と、薪ストーブ、緑化されたルーフトラス、つくり込まれた造作家具に囲まれたLDK「シャローム」で、生活時間の一部を自然なたちでほかの家族と過ごし、交流することができると断り、この試行の成否の判断にはまだ時間がかかりそうですが、当面この特別な部屋は、施設スタッフのラウンジやゲストルーム、利用者の方の早朝黙想の部屋などとしても大切に使われ、重宝されているようです。

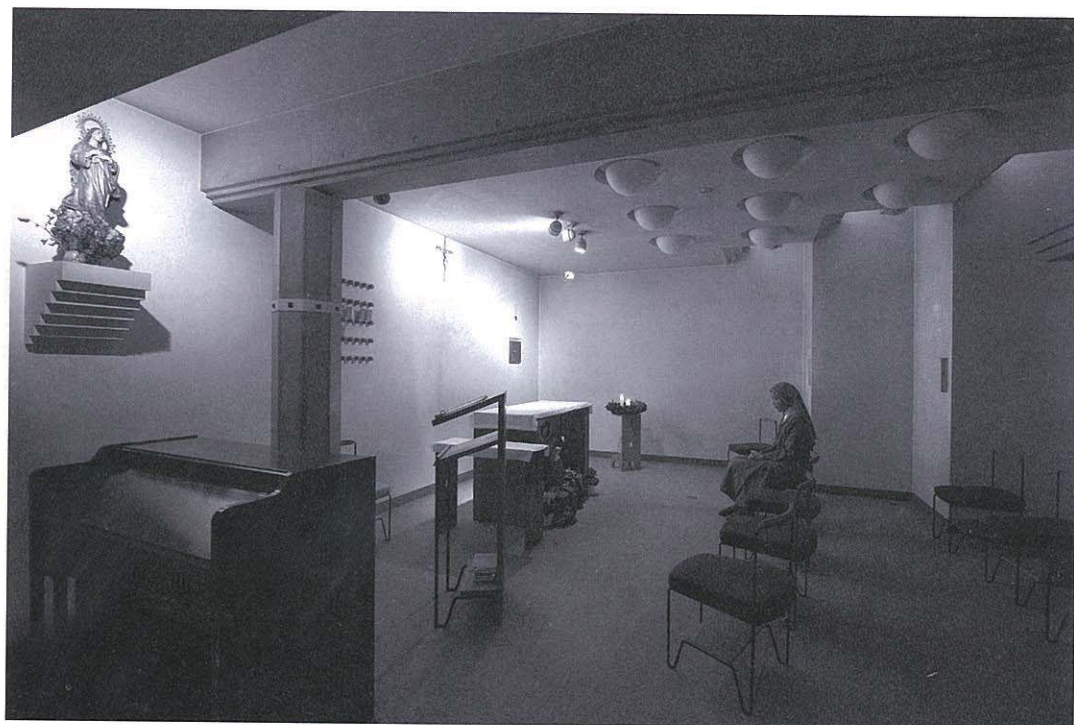
母子室は、バルコニーから南に眺望が開け、眼下には緑豊かな保育園と公園が見渡せます。室内仕上げや設備は民間の共同住宅の水準と変わらないのですが、意識的に木質材料が導入されています。

は30年以上の長きにわたり、それぞれ当該施設の施設長・園長を務めてこれられ、今もその現場にある友田直人・優子夫妻は、この法人・行政・地域の三位一体の取り組みの中心であり、「よく見える顔」なのです。おふたりは無言のうちに次のミッションを発信されています。

『疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのものにきなさい。休ませてあげよう』（マタイによる福音書）。



ふじき たかお
 藤木 隆男
 建築家
 藤木隆男建築研究所代表



写真：北田英治

母子生活支援施設 「カサ・デ・サンタマリア」 —“祈り”という福祉のかたち

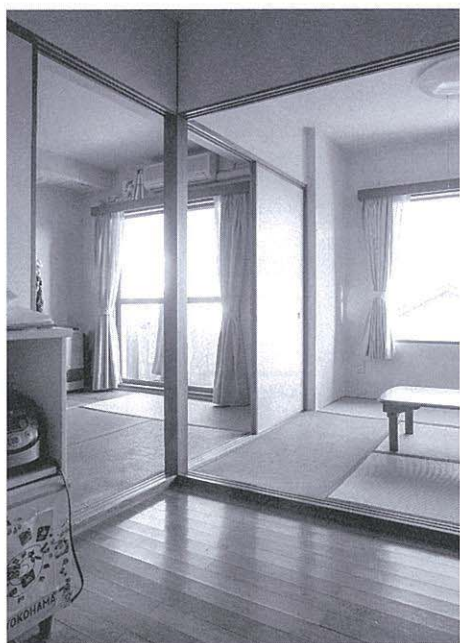
『カサ・デ・サンタマリア』 施設概要

母子生活支援施設（母子室20室+緊急一時保護3室/スタッフ：21名・うち、非常勤11名）
 神奈川県横浜市南区
 敷地面積1,758.14㎡（うち、母子施設用地約651㎡）
 鉄筋コンクリート造地上4階/延床面積1,722.91㎡
 総工費約7億円
 1996年3月開所
 設計：藤木隆男建築研究所/施工：日本国土開発株式会社横浜支店

遠く横浜ランドマークタワーを望む横浜山手（横浜市）の丘の上に、母子生活支援施設「カサ・デ・サンタマリア」があります。そこは改築前、「カトリック礼拝会横浜修道院」と「サンタマリア・インターナショナルスクール／幼稚園／女子寮」でした。その礼拝会は恵まれぬ、あるいは虐げられた若い女性を支援することを使命（カリスマ）とし、創始者のスペイン人修道女マリア・ミカエラ以来、世界各地で150年以上の活動歴をもつ女子修道会です。

カサ・デ・サンタマリア 成立の経緯

しかしカトリック教会第二バチカン公会議の方針「修道会は創立



右頁：礼拝会横浜修道院小聖堂で祈るシスター
 本頁右上：銅製建具でプライバシーが守られた母子室玄関周り
 右中：バス通りに面した施設外観全景（手前ミカエラ寮・奥母子施設）
 右下：改築前。女子寮とインターナショナルスクール（施設提供/1960年頃）
 左上：2DKタイプ母子室。DKから6畳、4.5畳寝室とバルコニー



の源泉に戻る」に従い事業の再編成が検討され、それまでの教育事業を廃止し、社会福祉事業のみを發展させることを決定したのです。すでに修道院内で始めていた日本初の民間シェルター「ミカエラ寮」はドメスティック・バイオレンス（以下、DV）被害者の顕在化とも相まってニーズが高く、そのノウハウの蓄積を評価した行政の要請もあり、その延長線上の事業として社会福祉法人礼拝会による母子生活支援施設を新しい活動目的に選び、シェルターだけでは解決しないDV被害母子の自立を長いスパンで支援することにしました。修道院と法人事業目的の根本的な見直し／再構築は、その事業所の物理的環境の大幅な再編成をもなつて計画されました。それまでの広い敷地（約5000㎡）の大半を市に譲渡、公園として市民に開放し、老朽化した既存建物に代わる新しい修道院と母子生活支

援施設は、残りの高低差のある限られた敷地（約1750㎡）に、周辺の民間の戸建住宅やマンションなどと変わらない建築的スケールや存在感で、目立つことなく地域に溶け込む「施設外観デザインとネーミング」でつくられました。また計画当初は、地域住民の強い懸念や、設置反対の多くの意見のなかでのスタートでした。

カサ・デ・サンタマリア型 母子室の考え方

限られた敷地の北東と南西のコーナーに、それぞれ「L字型」のブロックプランをもつ修道院と母子生活支援施設を配置しました。移転改築の全体プログラムのなかで、「2〜3階建片廊下・勾配屋根のおとなしい家型」の修道院をまず第一期として敷地奥に建設し、母子生活支援施設を手前道

木漏れ日空間／Making of a Room／ハウススキープ



撮影：北田英治

これまで本コーナーでは、この表題のもとに「児童福祉施設における子どもの生活空間／環境」について、10の事例（児童養護施設4、放課後児童クラブ1、保育園3、母子生活支援施設2）を通じて、そのあり方や考え方、つくり方を個別に紹介してきました。それら個々の事例のなかには一般化できる要素も多くありました。今回は最終回の「まとめ」として、筆者なりのエッセンスを抽出することを試みます。

それを表す3つのキーワードは、「木漏れ日空間」「Making of a Room」「ハウススキープ」です。これらは、この限られた誌面のなかではハウ・ツールの内容的な網羅たり

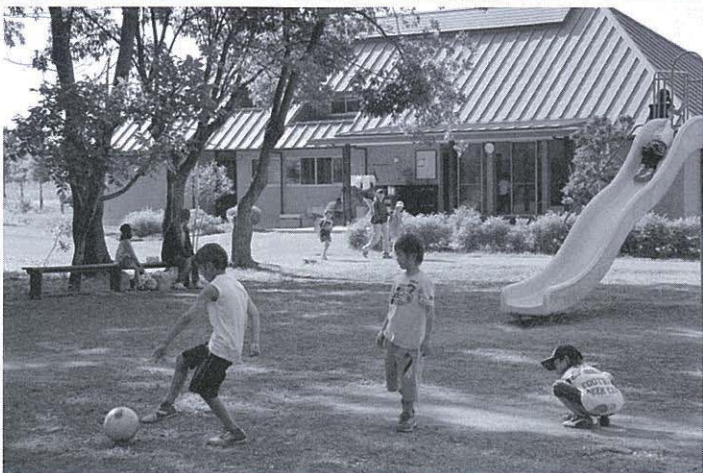
得ず、いきおい小さな思考の断片の提示、やや抽象的な言説になることをお許し願いたいと思います。

木漏れ日空間／環境

児童福祉施設における生活空間に限らず一般住宅でも、学校その他の都市／地域施設空間においても、人が安心して快適に生活できる空間・環境・状態は、生活をとり巻く多くの物理的／人的要素が、程よく混在、共存している状態ではないでしょうか。個室とリビング、広場と緑陰、人と車、大人／高齢者と子ども、スタッフと



右頁：リビングから庭を通して町を見る「小規模児童養護施設 M 舎」
本頁右上：ある晴れた休日の、テラスでの昼食「児童養護施設 T 園」
上中：児童園舎の玄関周りの鬱蒼とした植込み（同上 T 園）
左上：複数の建物の縁側で囲まれた、安心な草の中庭「児童養護施設 Y 園」
左下：施設建物と「木漏れ日の庭」と遊具のあるのどかな遊び場「M 放課後児童クラブ」



保護者／地域住民などが矛盾なく、妨げ合うことなく同じ場所に在る／居ることが許される領域、それをここでは「木漏れ日的状態」にある空間／環境」と呼びたいと思います。それは、選別、排除、統一するのと逆の方向性をもつ空間のことです。そしてこの「子どもの福祉的生活空間／環境」の良し悪しは、福祉活動プログラムの忠実に建築的な立ち上げによる合目的性に加えて、このあいまいな「木漏れ日性」をどう担保するかにかかっていると思えるのです。

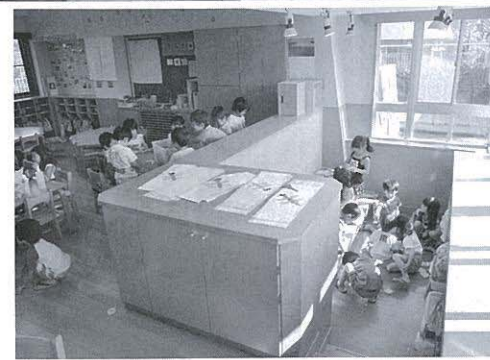
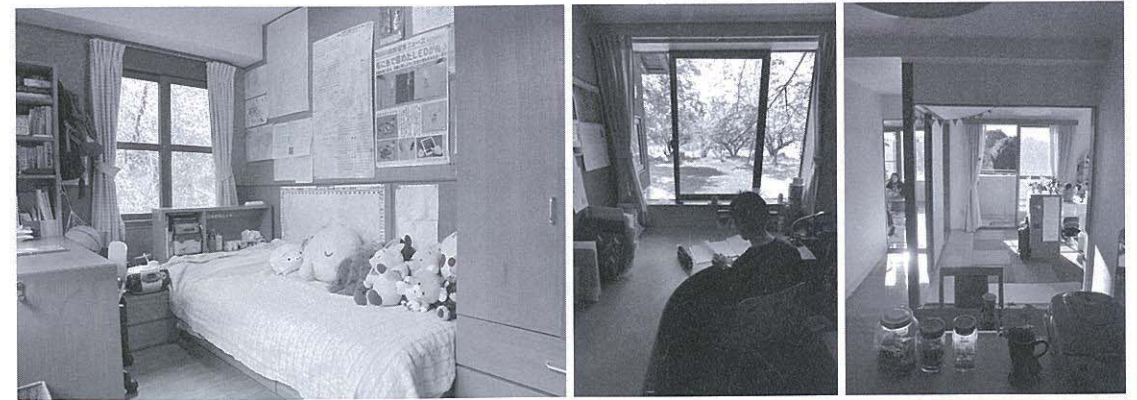
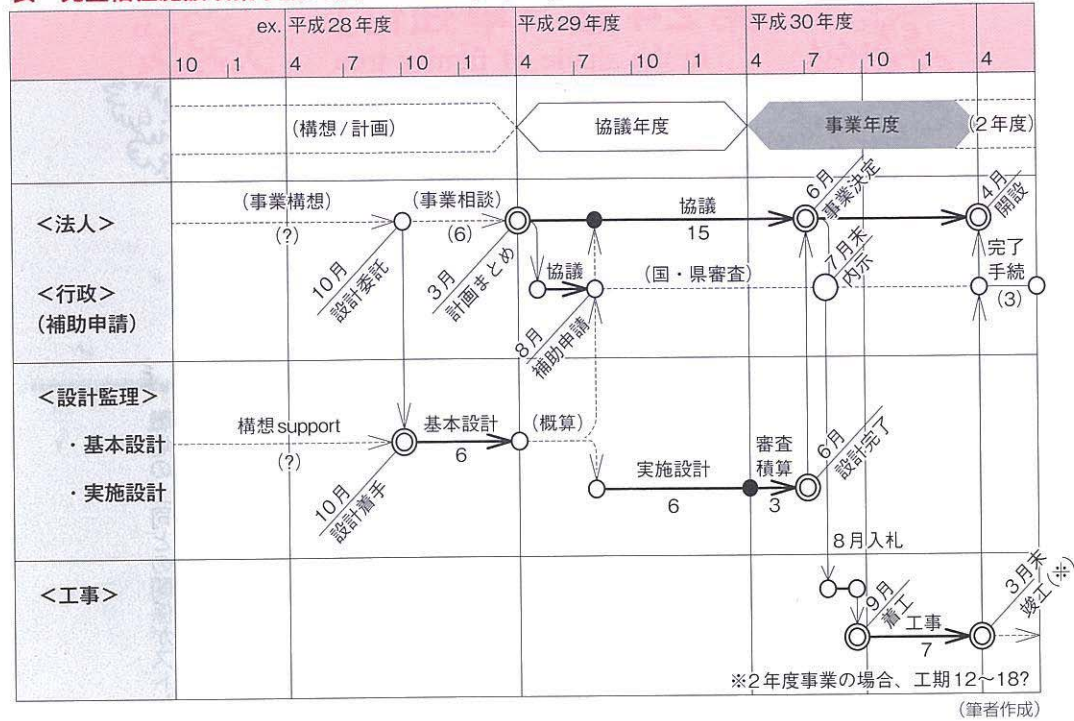
Making of a Room

「Architecture comes from the Making of a Room」これは20世紀アメリカの巨匠建築家、L・カーンの建築方法論／思想のひとつを表すフレーズであり、筆者も施設づくりにあたって常に念

頭においてきた言葉です。ここで「Room」とは、空間のすべてを表し、しかもその始原のことで、これも住宅に限らずいわゆる施設建築に共通するものです。それらを考え、計画・設計する時、まずもって、そして最大限留意すべきは、玄関やリビング、ホールなど晴れがましい空間ではなく、それぞれの最小単位生活空間・児童居室／寝室や保育室、母子室などであるべきだという思想です。それらは陽当たりがよく風が通り、質素だが清潔で、意味のある内装仕上げや家具などで設えられた、一人ひとりの子どもの拠り所／居場所：「Room」です。このRoomの探求こそ、施設づくり＝子どもの福祉的生活空間／環境づくりの要諦ではないでしょうか。

ハウススキープ

表 児童福祉施設改築事業スケジュール（モデル）



右上: 陽当たりと風通し、よく住み込まれた2DK 母子室「母子生活支援施設C」
 上中: 広いデスクをもつ高校生の個室「児童養護施設J寮」
 左上: ペットと机、たぐんのぬいぐるみのある児童居室「児童養護施設T園」
 右下: 外遊びからランチ、午睡へ自然に移行できるユニバーサルな保育室「K保育園」
 左中: 子どもたちの好きな段差やコーナーをつくり込んだ保育室「S保育園」
 左下: まちのカフェのように設えられたランチルーム「A保育園」

これまで紹介した10の事例は最近のものもいくつか含まれますが、多くは改築後10年以上が経過したものです。それらは自然環境に極力開き、ひだと翳りの多い空間性、木質系の素材による設えがなされてきています。ある意味、施設管理者にとっての子どもたちの安全、維持管理のしやすさや耐久性、省エネルギーなどを最優先にしている面があることは否めません。それゆえ常に修理に手をかけ、清潔に磨き上げるのに必要な心遣いとエネルギーは少なくないと思えます。子どもにいつでも用意される素材でも温かくおいしい食事、清潔な被服、家の内外の草花やディスプレイ・設えなどにより、彼らの生活空間/環境が自然で、快適であることを維持すること。「ハウスキープ」は、改築までの集中や高揚にも増して、子どもたちのその後の長い日常生活体験を決定づける条件となるはずで

改築事業
—スケジュールなど

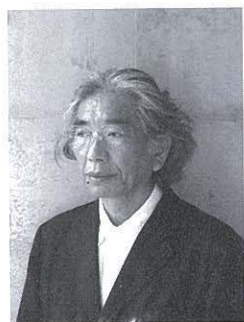
幸い、これまでの多くの事例はそのハウスキープが継続され、「古びてゆく」生活空間を地味でいつているといえましょう。スタッフのハウスキープ精神に頭が下がり、建築家冥利に尽きます。

今号では、子どもの福祉的生活空間/環境のあり方を描いた前号までの記事内容を補足する表現として、この連載のためにそのつど取材した施設の子どもの様子も掲載します。本文を直接説明するシーンとは限りませんが、通底する視線でとらえられていますのでご参照ください。

ところで、施設づくりを手伝う設計者側から見た、改築事業の流れ(平成28年度構想スタートか

ら30年度事業の場合)を表に示します。これをご覧いただければおわかりのように、改築にはおよそ3年がかかります。事業構想や行政との事前協議がまず大切ですし、改築の成否はここで方向づけられます。加えて信頼できる設計者の選定も欠かせません。あとはどれだけ法人・施設スタッフ/運営者が改築の意味を見極め、熱心に事業に取り組みむにかかっていると云えましょう。

本号でこの連載を終了します。ありがとうございました。



たかお 藤木
お 隆男
建築家 藤木隆男建築研究所代表